久原遺跡

KUBARA ISEKI

宗像市文化財調査報告書

第 19 集

概報　古代宗像をさぐる

1988

宗像市教育委員会

序　文

本市の歴史は古く、弥生時代の遺跡をはじめ、古墳時代の墳墓が500余りも市内各地に分布し、豊富な埋蔵文化財が存在します。

このたび、宗像市民総合センター建設に先立ち、昭和60年、61年の二ヶ年にかけて、久原遺跡の発掘調査が行われました。それにより、弥生時代の共同墓地が確認され、そのうちの一つのお墓からは、青銅製の剣と矛が見つかりました。この出土品は、市内では初めての発見で、貴重な資料といえます。

また、古墳時代の墳墓も50近く見つかり、一大墓地群であったことがわかりました。そこで、このような私達の過去の遺産を、将来にも伝えるために、前方後円墳一つと円墳三つを復元し、古墳公園として整備しております。この公園は、宗像市ユリックスに隣接していることから、図書館やプラネタリウムといった公共の学習の場と、大きなつながりをもっています。どうぞ教材として広くご活用いただきたいと存じます。

発掘調査中には、市内の小・中学生を中心に、何度か現地説明会を行い、生きた歴史の教材をじかに触れてもらうことが出来ました。また、このような歴史を少しでも多くの皆様に知っていただくために、発掘調査の様子や出土品を紹介したビデオと、古墳の整備状況のビデオを二本制作しました。これらも存分にご活用いただきたいと存じます。

ところで、久原遺跡の調査を担当し、古墳の整備にも陣頭指揮をとっていた酒井仁夫氏（主任主査）が、この１月に急逝しました。享年42でした。惜しい人材を失いました。市の文化財保護に力を尽くされ、ようやく文化財活動が軌道に乗り始めた矢先のことでした。慎んで哀悼の意を表し、この報告書を氏の霊前に捧げます。

昭和63年３月31日

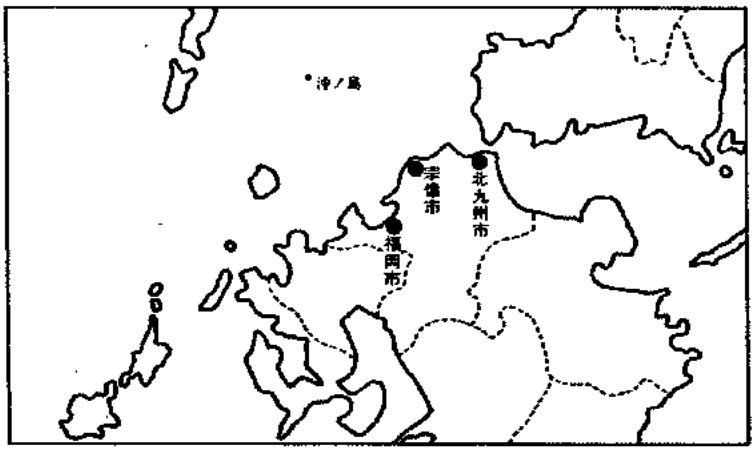
宗像市教育委員会
教育長　竹原　瑛

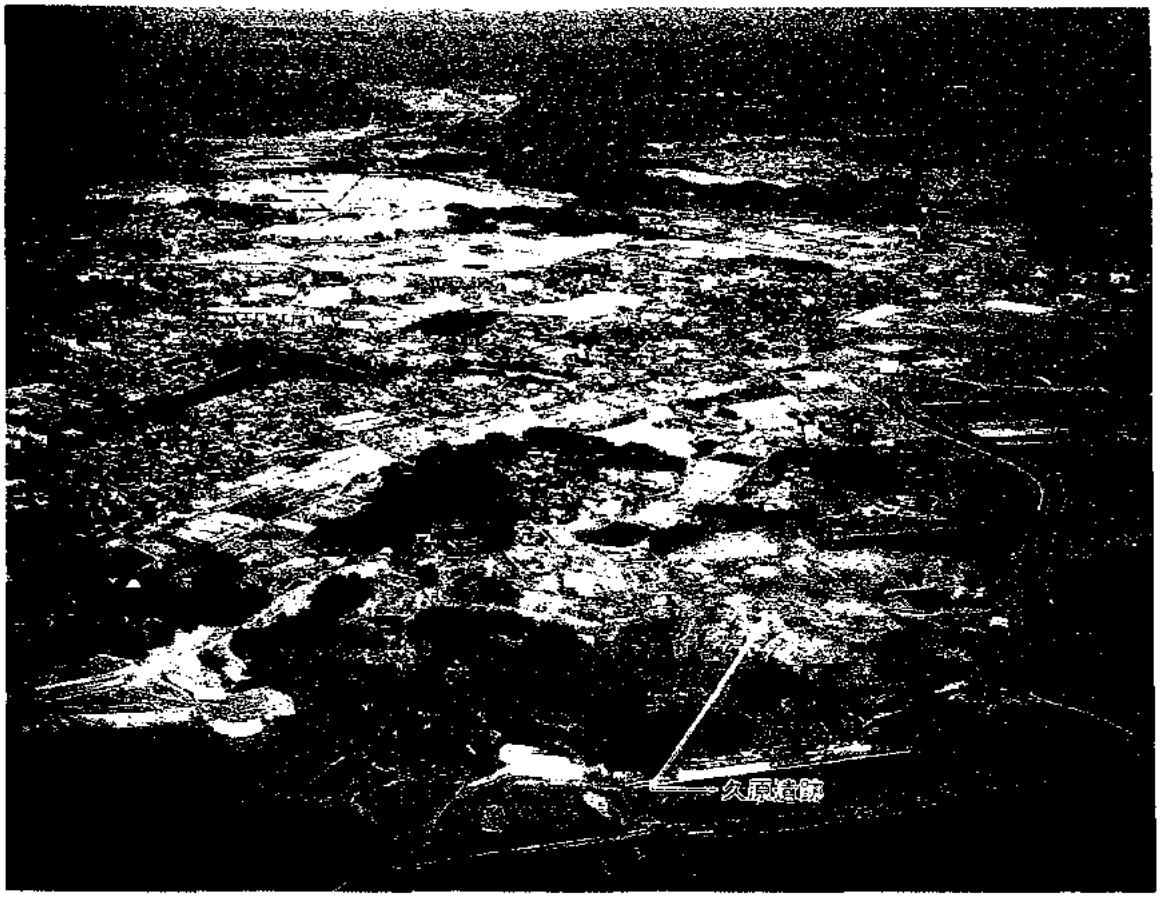
例　　言

1. 本書は宗像市民総合センター造成に伴い、昭和60年・61年度にかけて行われた緊急発掘の調査報告である。
2. 発掘調査は宗像市教育委員会が実施した。
3. 本書に使用した図の作製、製図は清水比呂之、清家直子、吉田浩二が行った。
4. 本書使用の写真撮影は清水が行った。また一部の写真は石丸洋氏、福岡県教育委員会、福岡市埋蔵文化財センター、津屋崎町教育委員会、青柳洋治氏、行田市立郷土博物館から提供を得た。
5. 本文の編集・執筆は清水が行った。
6. 題字は大賀由美子による。

目　　次

図　　版……1～11
久原遺跡の年表……12
古代の宗像と久原遺跡……13
久原遺跡とその周辺……14
弥生時代前期……16
弥生時代中期の共同墓地……18
周辺の共同墓地……19
鏡を副葬していた前期古墳（Ⅲ－4号墳）……20
鎧を副葬していた中期古墳（1－1号墳）……22
後期の前方後円墳（Ⅱ－3号墳）……24
宗像の前方後円墳……25
宗像の飾られた大刀（刀装具）……26
土器焼きの記録－ある民族例から－
（フィリピン・アトル村の場合）……27
宗像の蛇行鉄器……28
その他の埋葬施設……29
横穴式石室をもつ後期古墳……30
整備された古墳群……32
古墳時代の須恵器……34
須恵器の成形から仕上げまで……36
中世の陶磁器……38
弥生時代の宗像……40
古墳時代の宗像……42
Q & A……44
註・参考文献……46



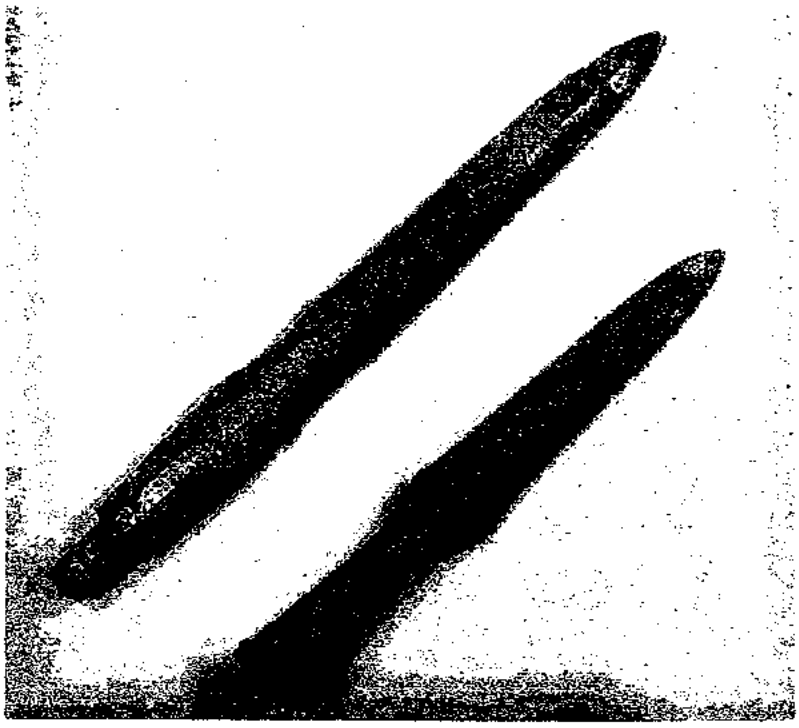


久原遺跡　　宗像市のほぼ中央に位置する。北には玄界灘、遺跡の周辺には釣川により形成された平野が広がる。

遺跡遠景　宗像四ツ塚が遠望出来る。
右から城山（中世、宗像家の最後の山城）、釜山、孔大寺山。さらにその左側に湯川山が立ち並ぶ。

遺跡遠景　正面に見えるのが許斐山。中世、宗像家の南端の山城である。

古墳群　尾根上に築かれた古墳の数々。
手前の▽印が前方後円墳で、他は円墳群。



銅剣と銅矛　　弥生時代中期の墓の副葬品

土壙墓群　　弥生時代中期の共同墓地。手前の大きな墓（Ⅳ－1号土壙墓）から銅剣と銅矛が出土。

鏡　内行花文鏡といわれ、「君宜高官」「生如山石」の銘が入る。

前期古墳　組合式木棺で、内行花文鏡の他、鉄の工具（鉄斧と鎚）を副葬する。

版築（Ⅰ－1号墳）

古墳の墳丘をつくる時につき固めた土盛りの跡が層をなす。

墳丘（Ⅰ－1号墳）

平野を望むように、台地の端にたたずむ古墳。

中期古墳（Ⅰ－1号墳）

竪穴式石室で、馬の鎧や鉄鏃などを副葬する。

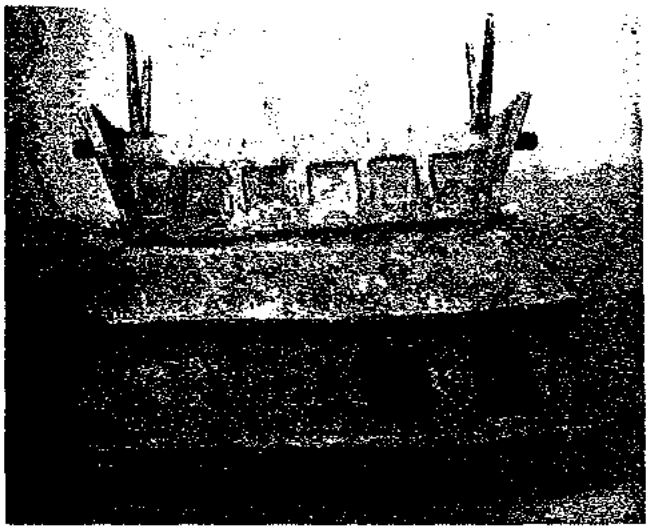
後期の前方後円墳（Ⅱ－3号墳）

久原古墳群の中で唯一の前方後円墳である。

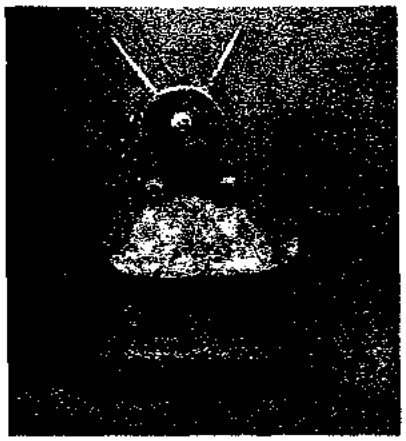
手前右手が前方後円墳，奥に後円部、その手前が前方部にあたる。

円筒埴輪　　前方後円墳の墳丘に立て並べられたと思われる。

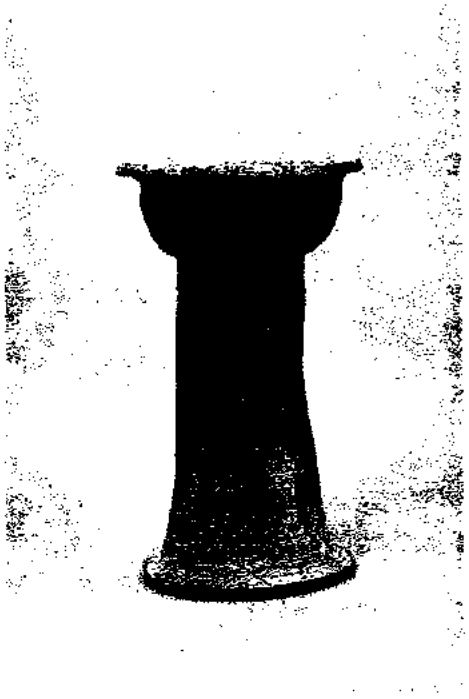
左が円筒埴輪、右が朝顔形円筒埴輪。



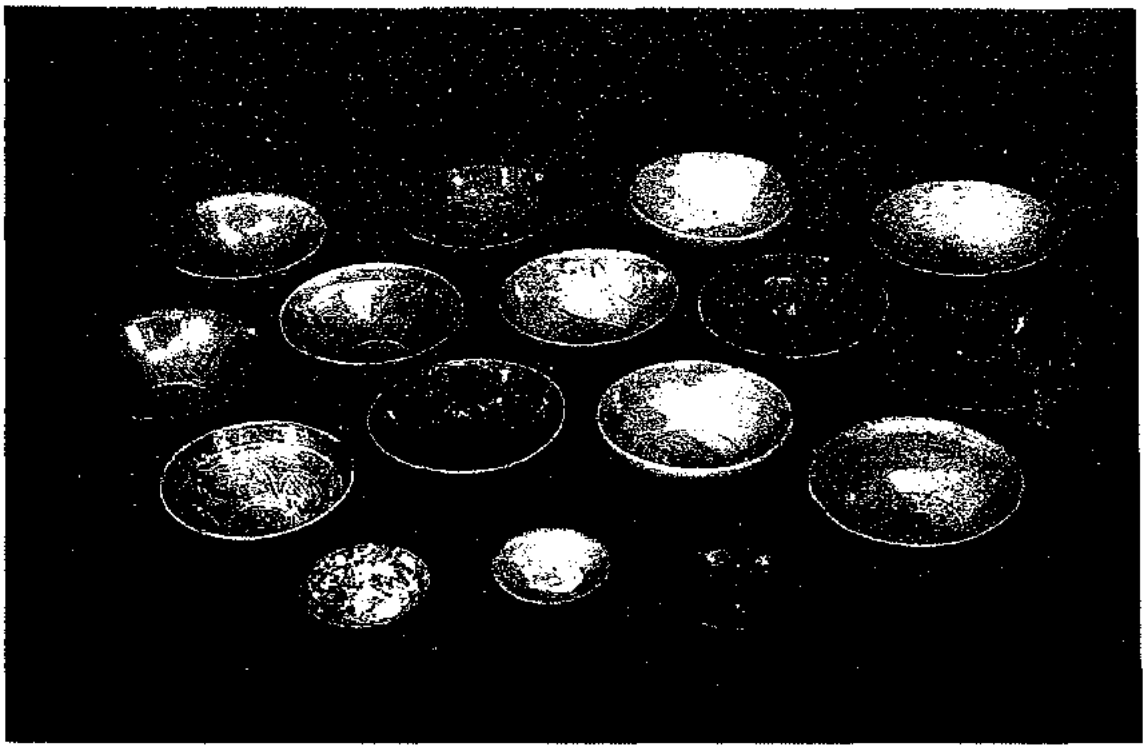
家形埴輪　入母屋造りの住居である。前方後円墳の墳頂部に据えられたものであろう。



家形埴輪（側面から）

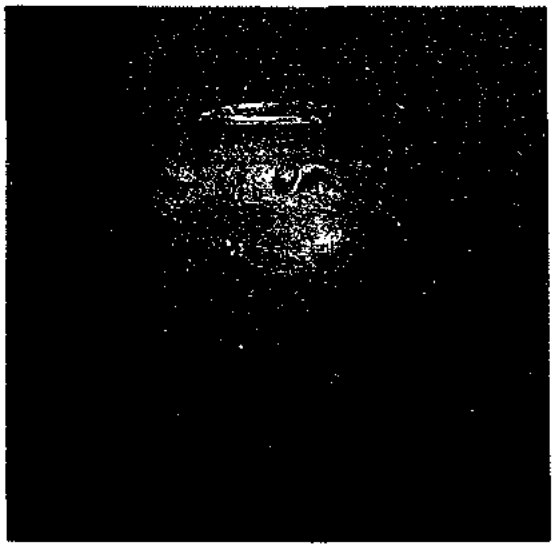


器台　前方後円墳のくびれ部に据えられていた。



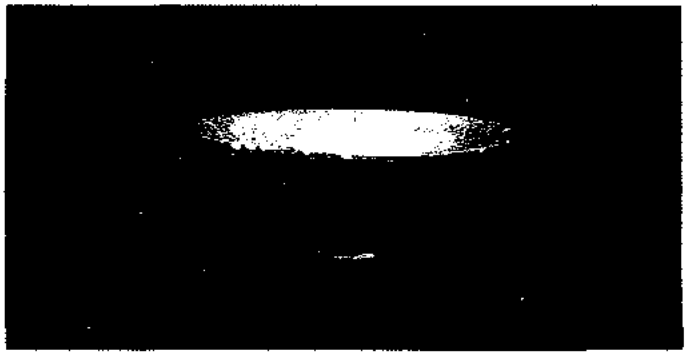
磁器　ほとんどが中国製品で、中世、日宋貿易の交易品が中心である。

大溝（Ⅰ－1号溝）　幅2～3m、長さ85mの溝の中から、中国製の陶磁器と中世の日常雑器が大量に出土した。



四耳壺　　中国製の中世陶器

白磁　　椀は玉縁ちといわれる厚みのある口をもつ。

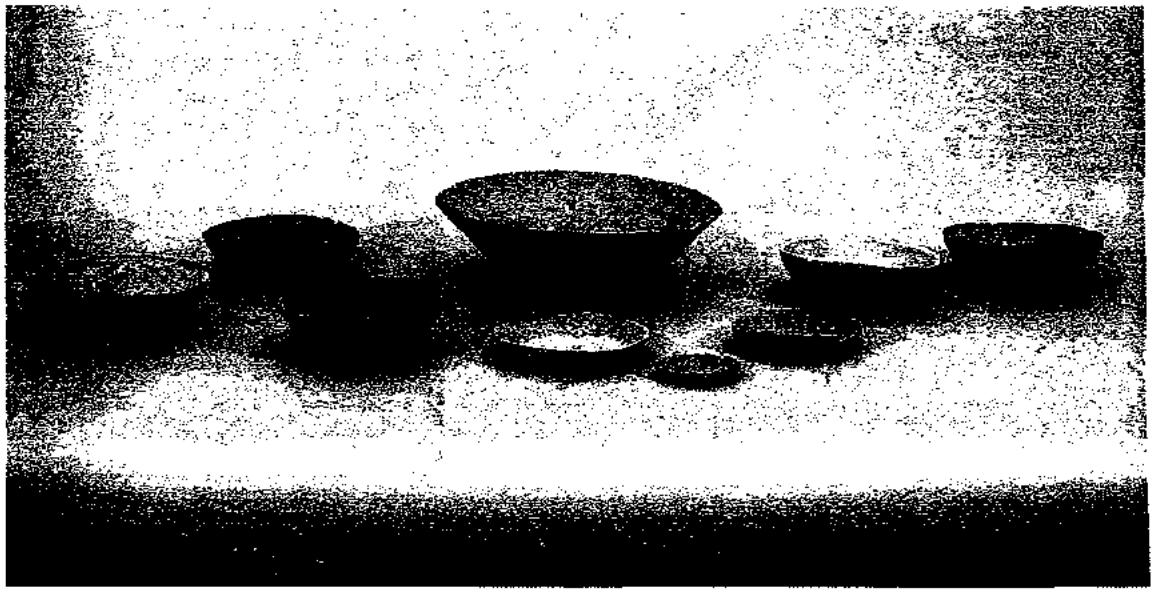


青磁　　鎬蓮弁といわれる蓮の花弁をかたどった文様をもつ。

弥生時代の土器

古墳時代の土師器

古墳時代の須恵器



中世の日常雑器

久原遺跡の年表

西暦	時代	主な出来事	久原遺跡と周辺
300	縄文時代		
200	弥生時代（前期）		久原遺跡共同墓地 貯蔵穴群
100			
0	弥生時代（中期）	57 倭奴国王、後漢より金印をうける	久原遺跡共同墓地
100			
200	弥生時代（後期）	239 卑弥呼帯方郡に遣使	
300	古墳時代（前期）	沖ノ島祭祀始まる	
400	古墳時代（中期）	倭・高句麗と戦い、敗戦 倭の五王の時代	久原遺跡に初めて古墳が築造される 海岸部に古墳が築造される（津屋崎町）
500	古墳時代（後期）	527 筑紫国造磐井の乱	久原古墳群の全盛期 久原遺跡に唯一の前方後円墳築かれる 久戸横穴群
600	古墳時代（終末期） 飛鳥時代	607 遣隋使始まる 645 大化の改新 646 大化の薄葬令 649 宗像郡の成立	
	白鳳時代	663 白村江の敗戦 672 壬申の乱	
700		703 持統天皇の火葬 710 平城京遷都	
	奈良時代	794 平安京遷都	
800	平安時代	この頃沖ノ島での祭祀終わる 894 遣唐使廃止	
900		911 神興廃寺造瓦 979 初めて宗像宮に大宮司職を置く	
1000			
1100		1119 鎮国寺板碑 1146 宗像領、鳥羽院に寄進 1166 平清盛 博多「袖の湊」築港	
1200	鎌倉時代	1221 承久の乱 1274 文永の役 } 元寇 1281 弘安の役 } 元寇	久原遺跡の中世遺跡
1300			

新原・奴山古墳群（津屋崎町）
（津屋崎町教育委員会より提供）

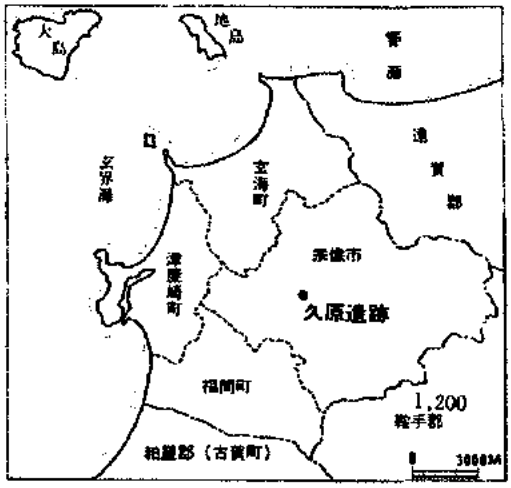
久戸横穴群（宗像市）
これら横穴群は、福岡県下の西限にあたる。

古代の宗像と久原遺跡

■ 人口の推移

宗像市は、北九州市と福岡市の真中にあたり、両都市の通勤圏としてベッドタウン化が進み、現在人口は約6万3千人、面積76.65㎢である。玄界灘に面して北から玄海町、津屋崎町、福間町が並び、大島村を含めて、宗像郡を構成する。

古代宗像（奈良から平安時代にかけて）といった時、その範囲は現在の宗像市、宗像郡および粕屋郡北部の古賀町あたりまで含んでいたといわれる。[1] 例えば10世紀（平安時代）に作成された『和名抄』によると、古代宗像郡は14郷からなっていた。この14郷という郡の規模は、当時からすればひじょうに大きなものである。



▲ 第1図 古代宗像の範囲

また筑前国の9世紀（平安時代）の一郷あたりの平均人口874人という沢田吾一氏の研究があり、それからすると古代宗像は12,236人であったことになる。さらに人口増加率を踏まえて、渡辺正気氏は「古墳時代前期の四世紀の人口は6,000人ほどであろうか」[2]と推定している。

このことから、古代宗像の地には、古墳時代、すでに多くの人々が居住していたことになる。

■ 歴史的背景

北部九州でも、特に玄界灘沿岸は大陸や朝鮮半島の文化を最初に受け入れた地域である。弥生時代における米作り、青銅製品といった先進文化の流入は、福岡市、唐津市、糸島郡などで顕著であった。ところが、宗像では、弥生時代の遺跡は少なく、大陸文化と直接結びつく出土品はあまり知られていなかった。その中で、今回、久原遺跡から弥生時代前期と中期の共同墓地が確認され、朝鮮半島との結びつきのある磨製石剣や青銅製品が発見されたことは、注目に値する。

それが次の古墳時代になると、様相が一変して来る。例えば古墳の数からいっても、古代宗像の範囲には約1,300基ほどの古墳が知られており、前方後円墳も確実なもので30基ある。これは福岡県下の前方後円墳の約⅕にあたり、有数の前方後円墳密集地帯である。またこの事実は4世紀後半から9世紀代にかけて、玄界灘の孤島、沖ノ島で、国家的規模での古代祭祀が行われたことにも関連づけられよう。特に沖ノ島では4世紀から7世紀にかけての祭祀場が中心を占めていることから、宗像での古墳の増加にも通じるものがある。つまり、沖ノ島祭祀を支えた宗像氏の力の反映がそこにあっただろうし、また一方では釣川流域の水田開発がそれだけ進んで来たともいえるだろう。

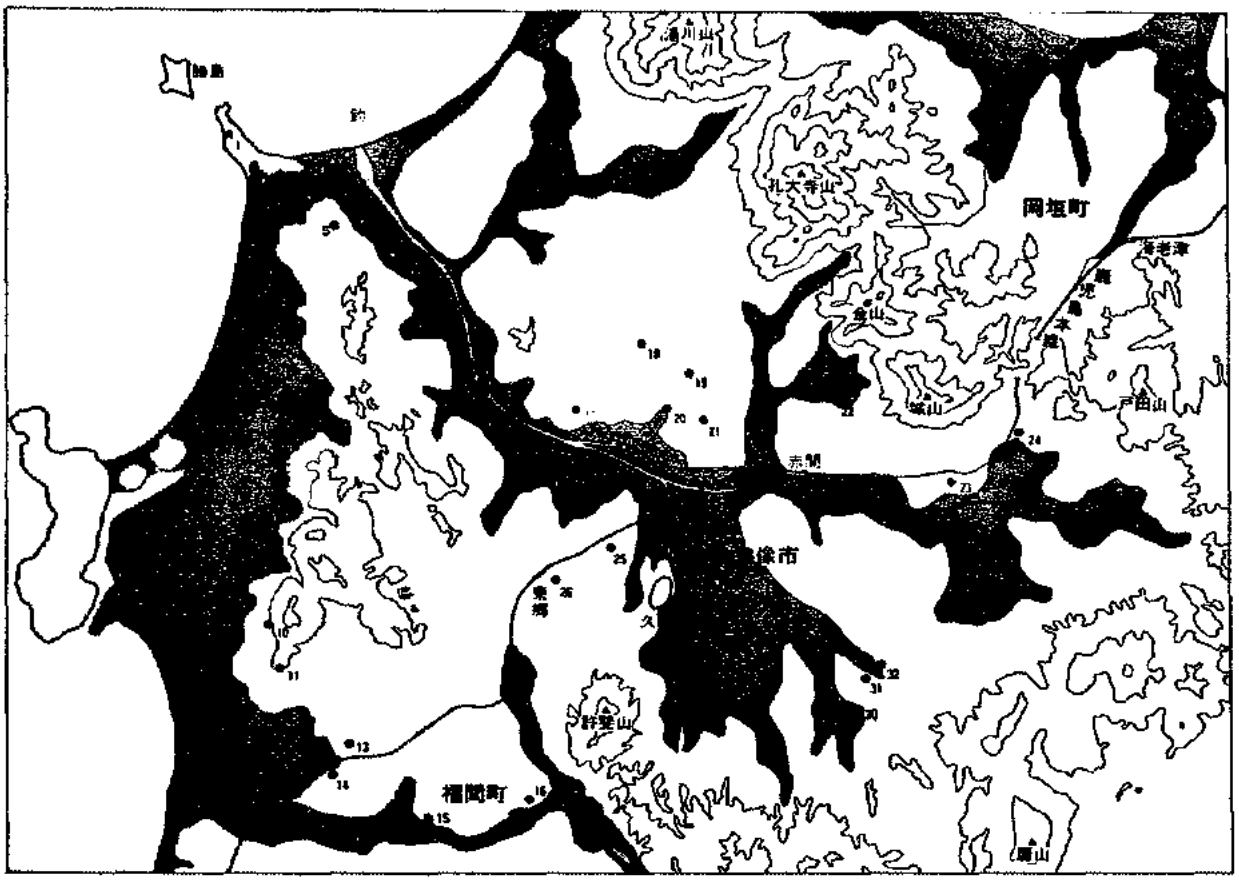
特に久原遺跡は、その釣川中流域の丘陵上に位置し、そこに広がる沖積地は宗像最大の平野である。このような当時の一等地において築かれたのが、4世紀から6世紀にかけての50基の古墳群である。

■ 久原遺跡

（位置）　宗像市のほぼ中央、大字久原、光岡、王丸にかけての約22,000㎡の地域である。標高約30～40ｍの丘陵上に立地する。

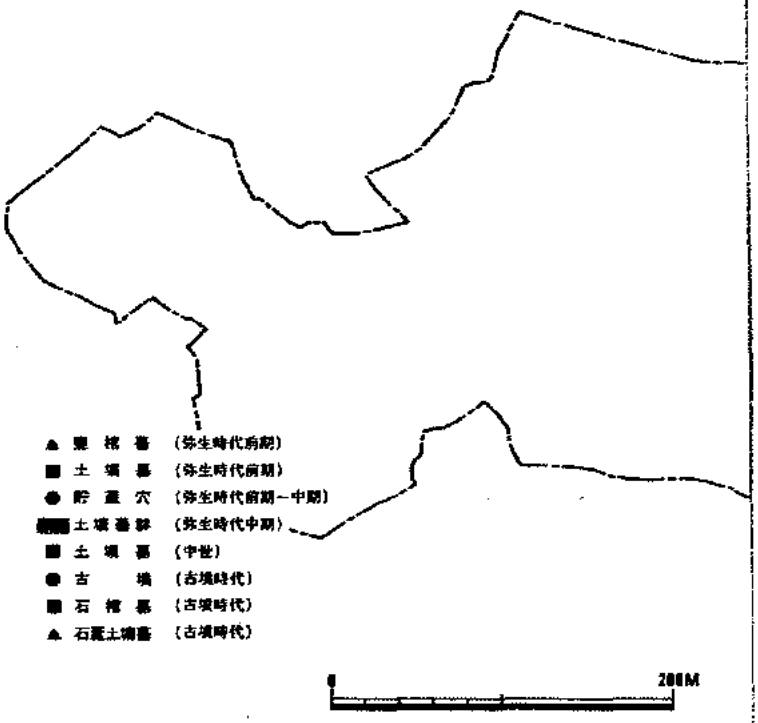
（埋蔵文化財の調査）　宗像市民総合センターの造成に伴い、昭和60年8月～61年9月にかけて、調査が実施された。

（遺跡の時期）　弥生時代（前期と中期）、古墳時代（4～6世紀）、中世（平安時代末～鎌倉時代）にかけての遺跡である。

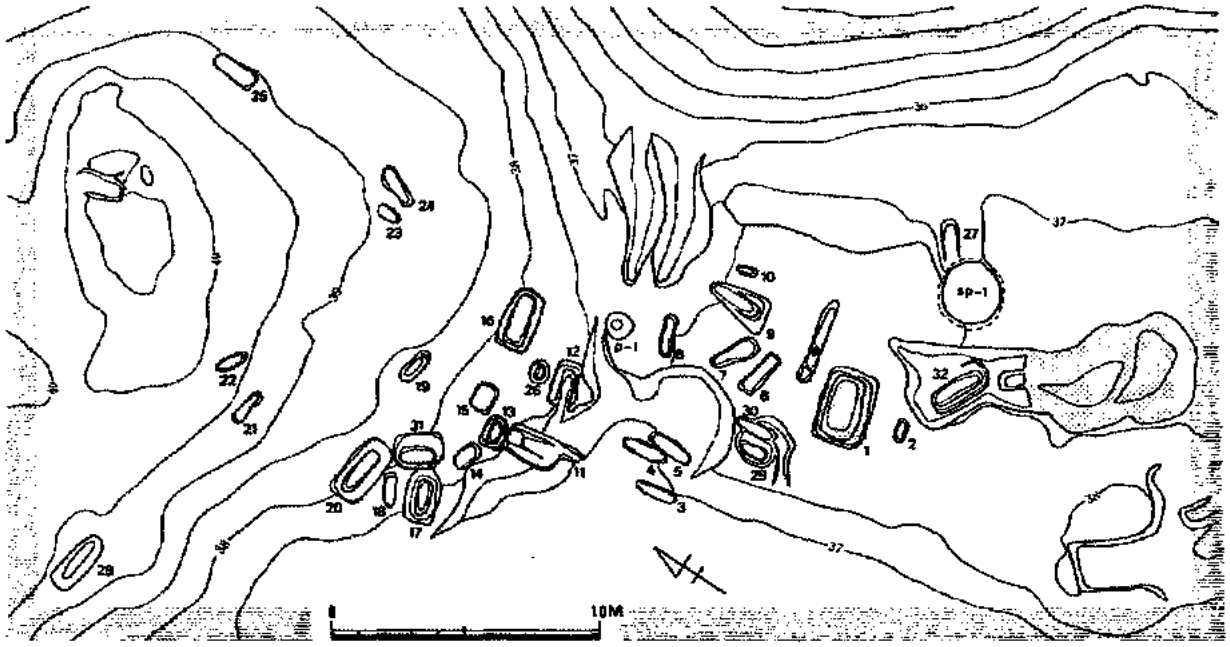


▲ 第2図　古代宗像の遺跡分布図

1. 上原古墳
2. 上野古墳（前方後円墳）
3. 勝浦14号墳
4. 勝浦12号墳
5. 桜京古墳（前方後円墳・装飾古墳）
6. 上高宮祭祀遺跡
7. 奴山8号墳（鍛冶具出土）
8. 奴山5号墳（陶質土器出土）
9. 奴山33・34号墳（皮袋形土器出土）
10. 清田ヶ浦古墳群（鉄滓出土）
11. 宮地嶽大塚古墳（巨石墳）
12. 今川遺跡（銅鏃出土）
13. 手光波切不動古墳（巨石墳）
14. 手光古墳群（蛇行鉄器出土）
15. 神興廃寺
16. 畦町遺跡
17. 久戸古墳群（三葉環頭出土・横穴群）
18. 相原古墳群（新羅土器出土）
19. 稲元黒巡遺跡（窯）
20. 稲元古墳群
21. 稲元日焼原遺跡（窯）
22. 城ヶ谷古墳群
23. 石丸遺跡（貯蔵穴）
24. 武丸大土ヶ遺跡
25. 東郷高塚（前方後円墳）
26. スベットウ古墳（前方後円墳）
27. 久原瀧ヶ下遺跡（鉄鏃出土）
28. 光岡長尾遺跡（土笛出土）
29. 大穂町原遺跡
30. 朝町山ノ口遺跡（鍛冶具出土）
31. 瀬谷古墳群（馬具出土）
32. 朝町百田遺跡（鉄滓出土）
33. 冨地原梅木遺跡（土壙墓群）

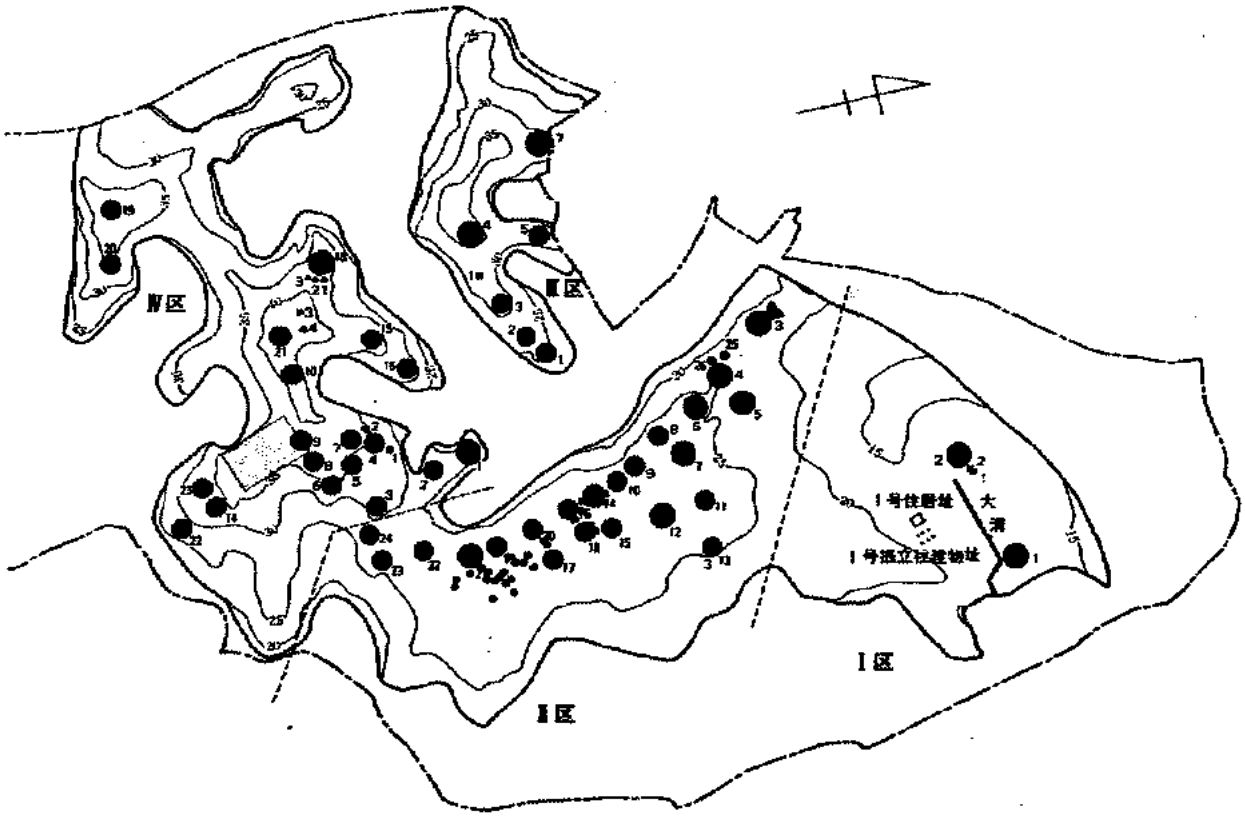


久原遺跡とその周辺



▲ 第3図 弥生時代中期土壙墓群の分布図（S＝1/250）

● 銅剣・銅矛出土の土壙墓
● 祭祀遺構



▲ 第4図 久原遺跡遺構分布図（S＝1/4,000）

弥生時代前期

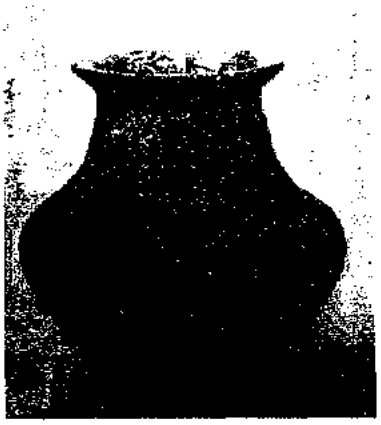
■ 墓地

弥生時代前期の墓として、地面を掘りくぼめて、その中に死者を埋葬した土壙墓と甕棺墓が発見された。土壙墓も甕棺墓も、比較的狭い範囲から、まとまって見つかっている。土壙墓の大きさは、長さ約2m前後、幅約60cm前後で、成人一体を葬ったものである。それに対し、甕棺墓は、壺の口の大きさが径約35cmと小さく、小児を埋葬したものと思われる。

土壙墓は全部で8基見つかっており、そのうちのII－8号土壙墓からは、有柄式石剣1点と有茎磨製石鏃4点が出土しており、死者と共に埋められた副葬品と思われる。またII－5号土壙墓からは、同じく副葬品として壺が発見され、その壺の時期から弥生時代前期の土壙墓群であることがわかった。

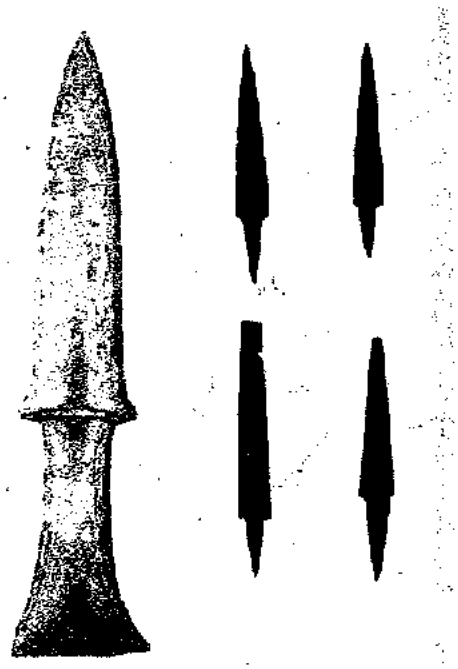
甕棺墓は全部で5基見つかっている。名称としては甕棺墓であるが、この場合は壺の中に死者を入れた後、鉢か壺でふたをしていたものと思われる。ところが、その後古墳時代に入ってから、甕棺墓のあった位置に古墳を築いているために、壺の上部が削られて、かぶせた土器はほとんど残っていなかった。

以上から、弥生時代前期、久原遺跡では成人用に土壙墓を、小児用に甕棺墓を用いていた事が明らかになった。



▲ II－5号土壙墓出土の土器

▲ II－8号土壙墓



■ 有柄式石剣と有茎磨製石鏃

ともに大陸系の磨製石器である。有柄式石剣は、手で握る柄がつくり出されており、銅剣をまねして作られたものである。有茎磨製石鏃は矢の矢柄にさしこむための茎がついている。

これらの石器は朝鮮半島に出土例が多く、水稲耕作とともに、朝鮮半島から伝わって来たことが考えられる。日本では分布が限られ、有柄式石剣の場合は対馬、北部九州、瀬戸内海に面した愛媛県で多く発見されている。

磨製石鏃は、朝鮮半島では墓（箱式石棺墓や支石墓）に副葬されるものがほとんどで、同様な傾向は対馬にも見られる（大半が箱式石棺墓）。ところが、北部九州では、集落跡のものが多く、逆に墓からの出土例が少ない。

久原遺跡では墓からの確実な出土であり、そのことからいえば、朝鮮半島や対馬との傾向に類似している。

▲ 貯蔵穴群（北から望む）

▲ 貯蔵穴出土の土器群

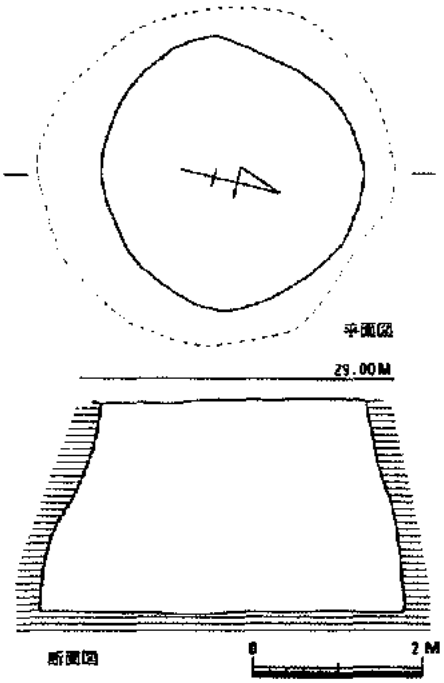
■ 貯蔵穴群

前期の共同墓地の南側平坦面から、前期終わりから中期の貯蔵穴が18基まとまって見つかった。貯蔵穴とは、貯蔵用の穴蔵の意味で、袋状に掘られた穴であることから、袋状竪穴とも呼ばれている。

入口部が狭く、底は円形の広がりをもっており、断面はフラスコ形になるものが多い。久原遺跡の貯蔵穴は上面が削られていた可能性が高く、実際には第５図よりも入口は狭かったと思われる。またこのⅡ－１号貯蔵穴が久原遺跡最大で、底の径が４ｍ、深さは約2.5ｍである。その他のものは底の径が２～３ｍである。

次に何を貯蔵していたかであるが、宗像市の石丸遺跡では、モミ殻つきのコメが貯蔵穴内の甕の中から出土したり、春日市の門田遺跡辻田地区の貯蔵穴の科学分析から、イネをはじめとした穀類や、マメ、ドングリ等を貯蔵していた可能性が指摘されている。[3]

ところが、貯蔵穴内の温度は冬は暖かく、夏は涼しい一定した状態であるが、湿度はひじょうに高い。この湿度のため、カビの繁殖しやすい条件であることから、長期間の保存に用いられたかどうかは不明である。



第５図　Ⅱ－１号貯蔵穴（Ｓ＝1/80）

▲ 甕棺墓（左下が１号、右上が２号甕棺墓）

▶ 甕棺（左が１号、右が２号甕棺）

弥生時代中期の共同墓地

▲ Ⅳ－1号土壙墓（南から）

銅剣と銅矛を出土した土壙墓で、一群の中で最大である（墓壙長軸2.9m、短軸1.9m、棺身長軸2.3m短軸1.2m）。墓の略中央から、銅剣と銅矛、東側から管玉12点（写真右側方向）が発見された。

■ 土壙墓群

弥生時代中期の共同墓地は、久原遺跡の最も南の尾根上で確認された。全部で33基の土壙墓が、群をなしている（第3図参照）。

中期の土壙墓は前期のものと異なり、2段に掘りこまれたものが多く、真中の深い掘り込みの中に、死者を安置している。また各々の大きさから見て、幼児から成人までが同じ共同墓地内に葬られていたことがわかる。

土壙墓の長軸は尾根線に平行するものと、直交するものに分けられるが、分布の上では両者が混在している。また明らかに幼児用と思われる特に小形のものは、成人墓の隣に並んでいる。

さらに、これら土壙墓群の南側の掘り込みの中から、底に穴をあけた祭祀用の壺が見つかっており、共同墓地に関る祭が行われたと考えられる。

■ 銅剣と銅矛

普通、銅剣と銅矛そして銅戈を青銅利器と総称するが、宗像ではこの青銅利器が今までほとんど知られていなかった。特に宗像で、墓の中から確実に青銅利器を出土したのは、久原遺跡が初めてである。

この銅剣、銅矛は、共に細形銅剣、細形銅矛と呼ばれ、弥生時代中期中ごろのものと思われる。

さて、細形銅矛であるが、柄をとりつける部分の両側に耳をもっている（片方は欠失）。普通はこの耳は一つであるので、特異な例といえる。他では、佐賀県（千々賀(ちちかこ)頃申(こうしんや)山出土）や長崎県（サカドウ遺跡）で、1例ずつ知られており、韓国（酒村面良洞里）でも1例のみの出土である。

つまり、国内では3例目の発見で、両耳付きの銅矛としては、日本で最も古いものと考えられる。

◀ 細形銅剣　長さ28cm、最大幅3.0cm

細形銅矛　長さ21.5cm、最大幅3.1cm ▶

▶ 汐井掛遺跡（鞍手郡若宮町所在）

長さ120mの尾根上につくられた、弥生時代後期から5世紀代（古墳時代）にかけての墓地群である。発見された墓は全部で280基、その大半を土壙墓と木棺墓が占めている。

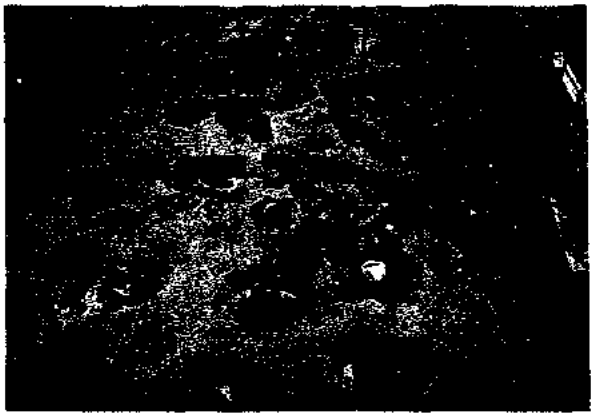
（福岡県教育委員会提供）

■ 北部九州の共同墓地

久原遺跡をはじめとして、宗像で確認された弥生時代の共同墓地は、ほとんど土壙墓群である。他に大きな墓地が見つかった高地原梅木遺跡では、中期の土壙墓が110基あまり発見された。久原遺跡同様、2段の掘り込みをもつものが多く、幼児から成人まで同じ共同墓地内に葬られていた。

また隣の鞍手郡、汐井掛遺跡でも、大きな共同墓地が見つかっている。ここでは木棺墓（掘り込みの中に板材を組合せて棺をつくるもの）151基を中心に、土壙墓（77基）、他に箱式石棺、石蓋土壙墓等が確認された。そして各々の大きさから見て、木棺墓、土壙墓は主として成人用、石蓋土壙墓は小児用、箱式石棺墓は双方にと使い分けされていたようである。[3]

これに対し、福岡、佐賀、筑後、唐津平野などは甕棺墓（甕や壺を棺として使用）が中心である。例えば福岡平野の金隈遺跡では、348基の甕棺墓と119基の木棺墓・土壙墓と2基の石棺墓が見つかった。時期は弥生時代前期から後期までであるが、大まかには最初に木棺墓・土壙墓が作られ、その後に甕棺墓、最後に石棺墓が作られたようである。また甕棺も成人用の大形のものから、小児用の小形のものまであり、共同の墓地であったことがわかる。[3]



▲ 史跡 金隈遺跡の全景（福岡市所在）

（福岡市埋蔵文化財センター提供）

▲ 金隈遺跡 280号甕棺墓（福岡市埋蔵文化財センター提供）

◀ **内行花文鏡**（径12.8cm）

青銅鏡の背面は、幾何学的な図案で構成されている。同心円を構図の基本とし、その一部に円を八等分した八個の円弧状の図形を配置する。

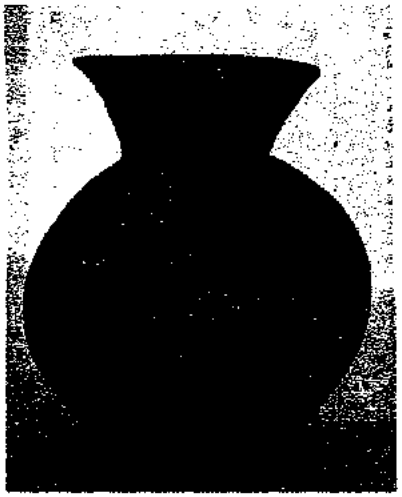
名前の由来であるが、花文鏡とは円弧を花弁にみたてており、それが鏡の中心に向かって並んでいるので内行という。また鏡中央のつまみの回りには銘がある。鏡が半分のため不明な文字はあるが、「君宜高官」と読みとれる。「あなたは高い位にふさわしい人だ」とうい意味であろう。[6] さらにその回りに、「生如山若」という銘もある。

鏡を副葬していた前期古墳（III－4号墳）

久原遺跡で、最初に築かれた古墳である。また宗像市郡を含めても、数少ない前期古墳で、4世紀後半代のものと思われる。弥生時代の共同墓地とは異なり、一個人を葬った墳墓で、鏡を副葬していたことから、この地域にかなり支配力をもった首長クラスの墓であったと推測出来る。

古墳の大きさは、径約18mと小形の円墳である。しかし、久原遺跡の古墳群の中では、最も高い尾根の頂部（標高約37m）に築かれ、遺跡周辺の平野部を見降ろせる場所にある。また埋葬施設は、土壙内におかれた木棺を粘土でつつみこんで埋めた、粘土槨といわれるものである。さらにこの木棺は板材で棺をつくった組合式木棺である。

▲ 鏡の出土状況（写真左から鉄斧、鏡、刀子（小刀））



▶ 古墳の周溝内出土の土師器壺

■ 調査の過程

埋葬施設は、木棺を粘土でつつみこんだ粘土郭であるが、実際には木の棺は朽ちて残っていない。そこで、つつみこんだ粘土や地山を掘り込んだ跡を調査することで、木棺の形を復元することになる。

①（埋葬施設の確認）古墳の墳頂は、径約９ｍの平坦面になっている。そこでその平坦面の中央部を少しずつ掘り下げていった。そして表面から約50cm下がったところで粘土の帯を２箇所確認した（短軸方向）。粘土帯は約４ｍ離れており、その間を掘り下げたところ、長方形の掘り込みになることがわかった。さらに長方形の掘り込みの中からも、うすい粘土の層が見つかった（写真①）。

この粘土の層が木棺の木蓋をおおった粘土で、また両脇にある粘土帯は、その木蓋を固定したものと思われる。

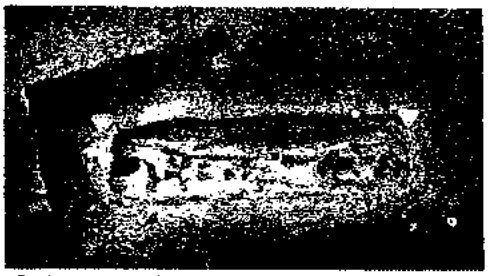
②（底面と遺物の確認）長方形の掘り込み中の粘土層を取り除くと、底面が確認できた。底面の両側は一段高くなっており、その高い段から鉄斧が出土し、低い面から鏡と刀子（小刀）が出土した（写真②）。

低くなった面は、幅50cm、長さ約180cmの長方形で、砂が敷かれている。ここが実際に死者を埋葬した槨床（かくしょう）にあたる。また鉄斧の出土した高い段は、通称オカズ箱と呼ばれ、副葬品収納用の区画である（第６図）。

③（木棺の痕跡）底面を清掃すると、掘り込みの両側（長軸方向）には粘土の帯があり、その粘土帯の内側で細い溝が確認出来た。そしてこの細い溝が木棺の板材（側板（がわいた））を立てた痕跡である（写真③）。

④（土壙の確認）全ての粘土を取り除くと、最初に地山を掘り込んで作った土壙が確認出来た。底面には長軸方向と短軸方向に２列ずつ深い溝が掘られている（写真④）。

これら溝の中に粘土を敷いて、棺の板材を立て、さらに粘質土をつめて、棺を固定したと思われる。また中央の深い土壙の回りに、広い長方形の掘り込みが確認出来たため、二段に掘り込まれた土壙であることがわかった（第６図）。

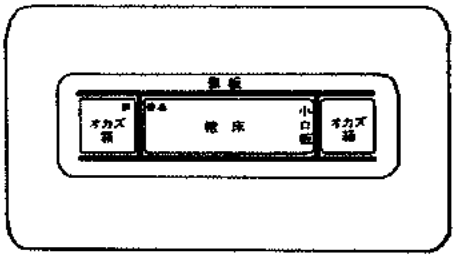


①（▽が粘土帯）

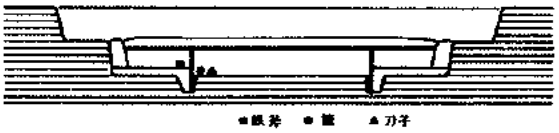
②（▽が遺物の出土箇所）

③（▽が側板の痕跡）

④（▽が深い溝）



（平面）



（断面）

第６図　皇－４号墳の埋葬施設の模式図

▲ 棺外副葬品出土状況（①鉄鏃　②鉄斧　③鎌）

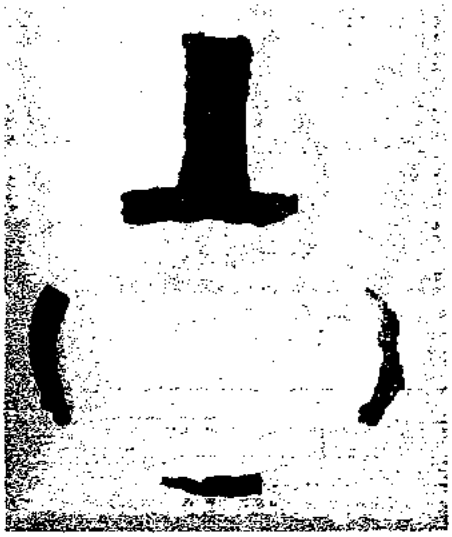
▲ 竪穴式石室

鐙を副葬していた中期古墳（Ⅰ－1号墳）

Ⅲ－4号墳（前期古墳）が、最も高い尾根の頂部に位置していたのに対し、この古墳は台地の縁辺に1基だけ築かれた。古墳の大きさは、径約17mの円墳（現況）で、埋葬施設は小形の竪穴式石室である。この石室は四側に石を積み上げて壁をつくり、棺を入れてから蓋を閉める構造となっている。Ⅰ－1号墳の場合は、小口に大きな石を立て、側壁は板状の割石を積み上げ、長さ2.8m、幅0.6～0.8m、高さ1.5mの空間をつくり上げる。そして大きな石で蓋をしたわけだが（天井石）、中にどのような棺を入れたかは、痕跡がないため不明である。また底面には玉砂利が敷かれ、壁には赤い顔料が塗られていた。

墳丘は、土を一枚一枚つき固めて積み上げ、地面から高さ約3mまで盛土している。また副葬品は、全て石室の外の天井石のそばから、まとまって見つかっている。鉄斧、鉄鏃、鉾（槍の先を反らしたような形の刃に、柄をつけたもので、カンナの役割）、鐙（鞍の脇に下げ、足を踏みかけるための馬具）などである。

また、これらの出土品や石室の形態などから、5世紀の古墳と考えられる。



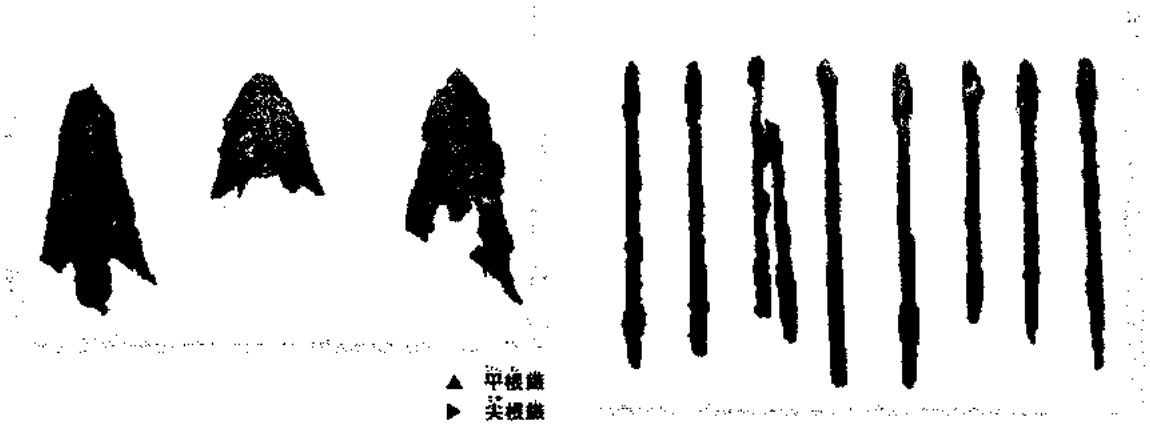
◀ 鉄製輪鐙

5世紀初めの段階で、馬具が日本に登場する。馬具も初期のものは、騎乗のための実用的な轡、クツワ、鐙などで、杏葉などの飾り物は、やや遅れて大陸、朝鮮半島から日本に入って来るようである（第8図参照）。

さて、鐙であるが、いくつかの種類があり、木で輪を作り補強として鉄を被せたもの（木心鉄被輪鐙）や、鉄のみの輪鐙（鉄製輪鐙）、足を入れるソケットを作った壺鐙があげられる。

日本で初期の段階にみられる鐙は木心鉄被輪鐙で、鉄製輪鐙はそれよりも後出（6世紀）のものであった。ところが、久原遺跡出土の鐙は、幅1.5cm前後、厚さ約6mmのつり輪状になった（長径推定15cm、短径推定10cm）鉄製輪鐙で、5世紀のものと考えられる。

つまり、鉄製輪鐙の最も初期のものといえそうである。



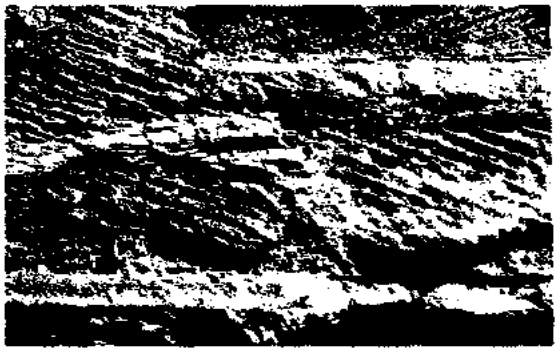
▲ 平根鏃
▶ 尖根鏃

■ 鉄鏃

射撃用武器としての矢は、矢柄の一端に鏃（矢尻）をつけ、他端に矢羽根をとりつけたものである。全長6.70cm～90cm位で、矢柄は木やシノダケを用いたようである。鏃は古墳時代前期には銅鏃があるものの、古墳時代を通じて鉄鏃が多い。

Ⅰ－1号墳の棺外に副葬されていた鉄鏃の数は、残りの良いものだけで60点余りある。出土した鉄鏃の形態は、偏平で幅の広い平根鏃と、細みで鋭い尖根鏃に分けられる。平根鏃は深い逆刺をもち、透穴をもつものがある。また尖根鏃には、鏃と矢柄を接続した部分に桜の皮を巻きつけている。数の上では尖根鏃が圧倒的に多く、平根鏃はわずか5点の出土である。

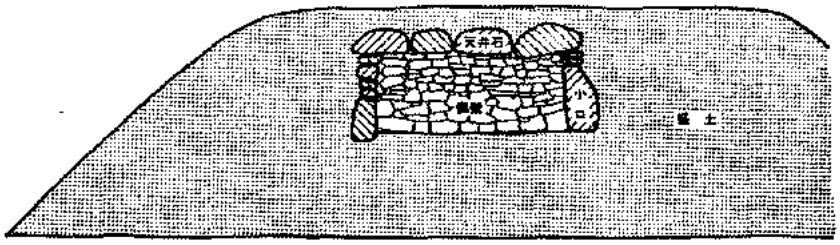
また古墳時代前期には平根鏃が多く、中期から後期にかけて貫通性の高い尖根鏃が増加する傾向にある。



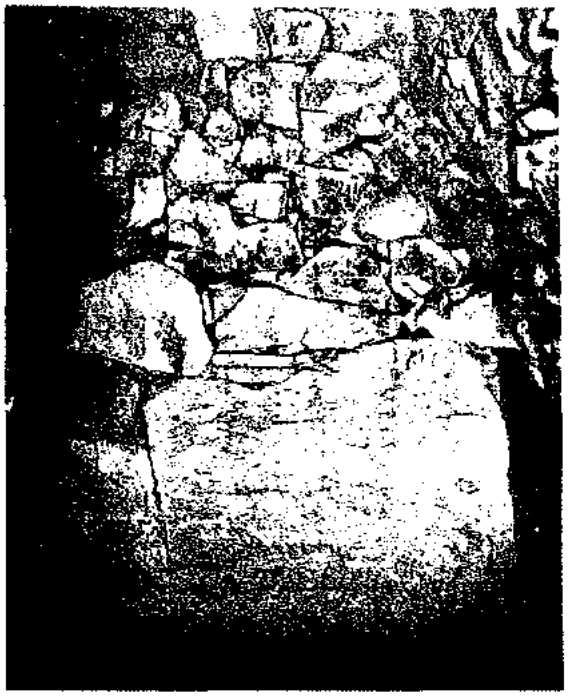
◀ 矢羽根

矢羽根は、矢をまっすぐに飛ばし、回転しながらも鋭く射当てるためにとりつけたものである。古墳時代の矢羽根は二枚羽、三枚羽、四枚羽が見られ、二枚羽が主のようである。

左の拡大写真は鉄鏃に付着していた矢羽根の痕跡であるが、山鳥の羽根の可能性が強い。



第7図　Ⅰ－1号墳（竪穴式石室）断面の模式図



▲ 前方後円墳の横穴式石室の奥壁

▶ 横穴式石室の天井

後期の前方後円墳（Ⅱ－3号墳）

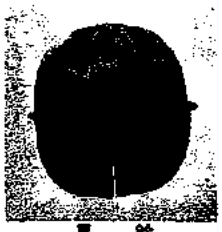
6世紀中頃に、唯一の前方後円墳が築かれた。回りには溝があり（周溝）、溝の外側には堤（周堤）がある。

後円部の盛土の中には、石で組まれた単室の横穴式石室があり、広さは畳約5畳、高さ2.7mある。また西側のくびれ部にむかって、墓道が開かれている（第13図）。

前方後円墳の墳丘上には、円筒埴輪が並び、家形埴輪や人物埴輪の破片も見つかった。また、石室の中から、馬具や、鉄製工具なども出土している。

■ 計測値

墳丘	現況の全長	45m
	〃 前方部幅	20m
	〃 くびれ部幅	12m
	〃 後円部径	26m
横穴式石室	全長	5.5m



馬　鈴

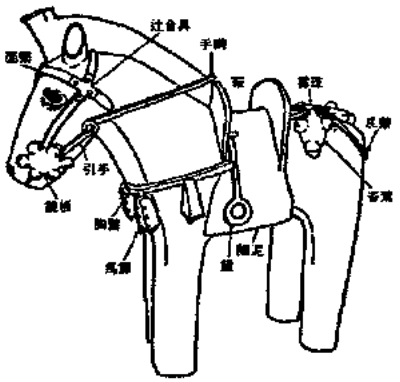
辻金具

■ 石室内出土の馬具

石室内から、鉄鏃（武具）、刀子・鉄斧・鉇（工具）、辻金具・馬鈴・貝製雲珠（馬具）が出土した。

馬鈴は高さ5.2cm、径5.1cmの球形で、金ぱくをはった青銅製である。この鈴が馬のどこにつけられたかは不明であるが、通状は胸繋、面繋、尻繋などに固定したり、垂下したものである。

辻金具は面繋、尻繋の革紐が交差する部分に取りつけ、普通四つの脚をもつ。この辻金具は最大幅7.0cm、高さ3.2cmで、金ぱくをはった青銅製である。



第8図　馬具の名称
（世界考古学大系3　1975より転載）

宗像の前方後円墳

玄界灘に浮かぶ沖ノ島の古代祭祀に、深いかかわりをもつ宗像氏。その本拠地である宗像には、多くの前方後円墳が存在する。

玄界灘に面した津屋崎町には、古墳時代中期（５世紀代）になると、大形の古墳が集中的に築かれる。特に津屋崎町の勝浦、奴山、須多田と呼ばれる地域には前方後円墳が多い。ここは現在では水田が広がっているが、かつては海がかなり内陸まで入り込んでいた可能性がある。また多くの前方後円墳が西の海を望むように[illegible]おり、海上交通を支えた宗像氏の力の反映を示しているよ[illegible]われる。

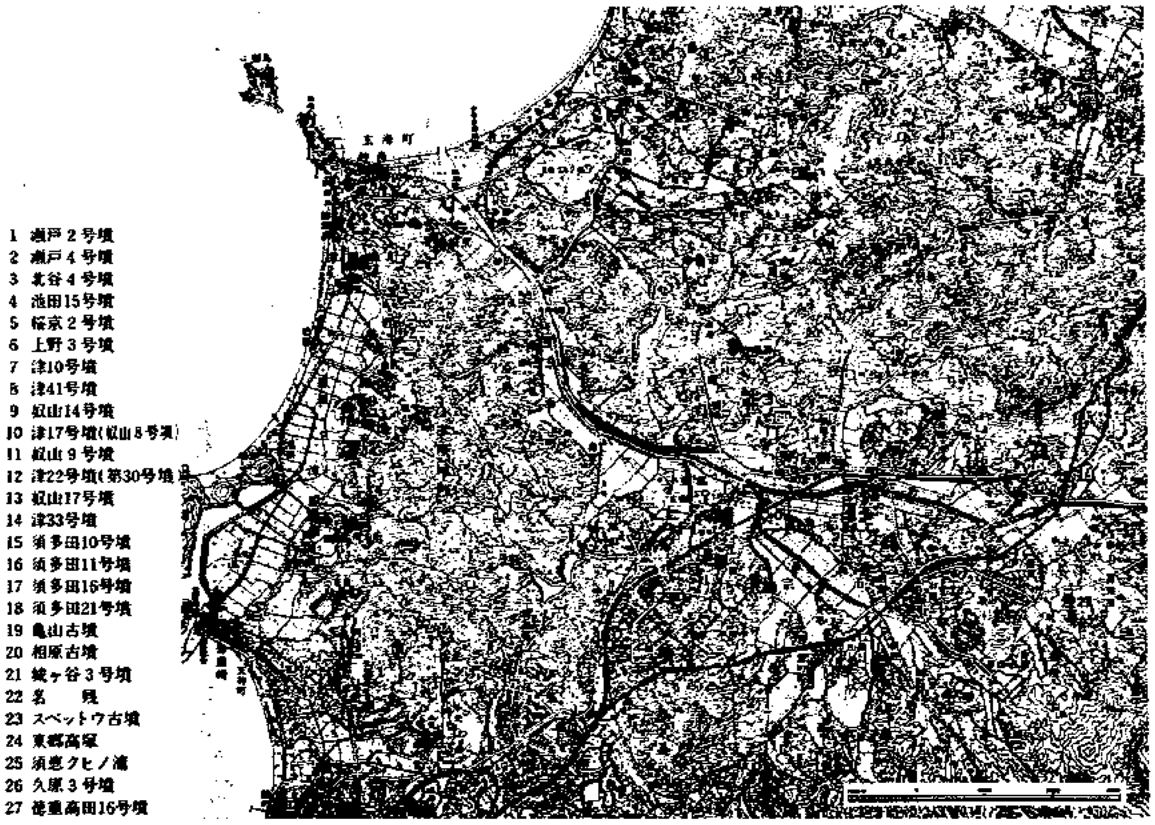
それが古墳時代後期（６世紀代）に入ると、前方後円墳を含む古墳群は、釣川を中心とした内陸部の丘陵地に分布を移す。特に釣川中流域は宗像最大の平野で、これを望むように久原Ⅱ－３号墳、スベットウ前方後円墳が存在する。

この前方後円墳をはじめとした遺跡の集中状況は、この中流域を中心とした平野部の水田開発が進み、高い農業生産力が生まれて来たことを示しているように思われる。

▲ 新原・奴山古墳群　第30号墳（津屋崎町）

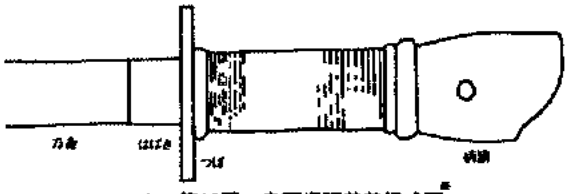
現存の全長54ｍ、後円部径28ｍ、前方部最大幅34ｍ、最小幅16.7ｍで、原形をよく残した前方後円墳である。[7]

（津屋崎町教育委員会より提供）

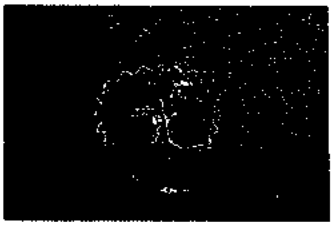


第５図　宗像の前方後円墳分布図

宗像の飾られた大刀（刀装具）



▲ 第10図　圭頭柄頭装着模式図※



▲ 三葉環頭（久戸９号墳出土）

▲ 圭頭柄頭とつば・はばき（久戸17・19号墳出土）

■ 銀象眼された三葉環頭（久戸９号墳出土・５世紀中ごろ）

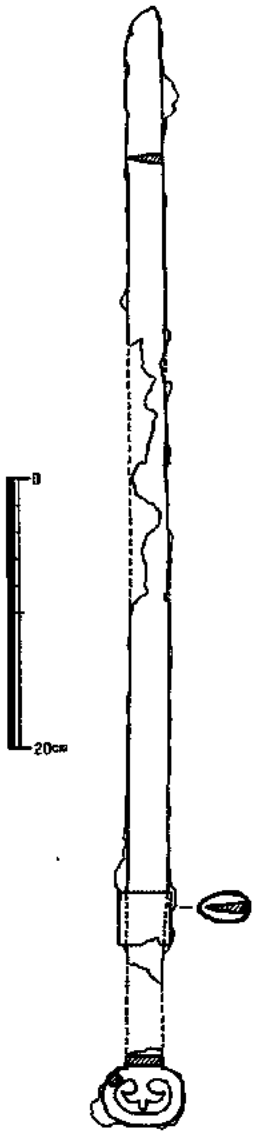
全長約84cmの大刀の柄頭で、長さ4.5cm、幅5.8cmのリング形（環頭）である。その中に三つ葉の突起があり、三葉環頭と呼ばれる。全国では約20例見つかっているが、銀の象眼の施されたものは、久戸出土のものと奈良県、野山Ａ２号墳（５世紀後半）の二例だけである。

象眼とは、石、木、青銅、鉄などの素地に紋様を彫りくぼめて、金銀、玉、青石（トルコ石）、ガラス、木、骨などをはめこむ（嵌入する）細工のことである。この久戸９号墳出土のものは、鉄の上からタガネで線を彫り、銀を埋め込んだものと思われる。※

■ 金銅製の圭頭柄頭（久戸17号・19号墳出土）

全て、７世紀前半のもので、①と②が組合せになる（19号墳出土）。①が圭頭柄頭で、②、③（17号墳出土）は刀のつばと、そのつばをとめて刀身が抜けないようにする金具（はばき）である。

圭頭の圭とは、古来中国の天子が諸侯に土地を与えた時の証拠の玉のことで、上が丸く下が四角いものをいう。とりつけ方法は第10図が予想され、はばきと柄頭の間には柄木が入り、その上を金銅線などで巻きつけたものと思われる。



▲ 第11図　大刀と三葉環頭（久戸９号墳）

※横田義章1985「圭頭と頭椎」『九州歴史資料館研究論集11』P.113より転載（名称は筆者が一部改変）

土器焼きの記録ーある民族例からー（フィリピン・アトル村の場合）

縄文土器や弥生土器は、野焼きされたため、どのように焼かれたか確かなことがわかっていない。ところが現在、東南アジア各地では、野焼きにより弥生土器のような素焼きの土器を作っている。そこで一例として、フィリピン、アトル村の土器焼きを紹介したい。

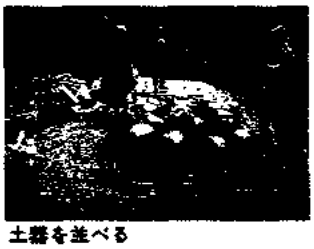
この村は、フィリピン、ルソン島の北部に位置している。住民の多くは農業に従事しているが、土器をつくるのは、全て主婦の仕事である。粘土は近くの川べりで採取され、２種類の粘土を掘り出してくる。それを木製の竪杵で、３人がかりでつき砕き（約40分）、こね合せる。粘土は径20cm、高さ15cmの円柱形のブロックにして、一晩寝かせておく。土器には壺形、鉢形、甕形などがあり、手づくねにしたり、回転台を用いてつくり上げる。そしてつくり上げた後、中２日程陰干しにする。

次に焼成であるが、まず地面に乾燥した細い丸竹を数十本並べ、その上に井げた状に丸竹を置き、焼成の場をつくる。広さは畳３畳ほどであるが、そこに大形の土器を並べ、その上に小形のものを置くと、40点近くになる。土器の多くは口を横にし、寝かせた状態である。次に回りを割竹でおおっていくが、割竹は太めの竹を四つ裂きにしたものである。そして手にした稲のわらに点火し、それを割り竹の間に差し込んで火をつける。わらは火入後に、次々と割り竹の上にかぶせていく。そして火が回りを一周した後、最後に上面部にワラを投げ込む。火入してから約30分後には竹は全て燃えつき、その後しばらくの間、土器を熱い灰の中に放置する。そして最後に灰を取り除くと、赤褐色に焼けた土器が出来上がっている。時間にして点火後、わずか１時間30分のことである。[3]

以上が、アトル村での土器づくりから土器焼きまでの全工程である。

竹を四つ裂きにする

焼成の場をつくる


土器を並べる

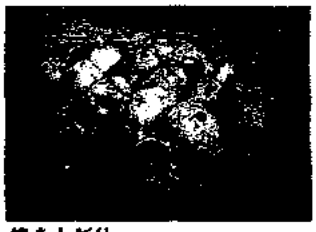
割り竹を立てかける

割り竹で土器を囲む

火をつける

火が全周する

火入れ後、１時間半


焼き上がり

（写真は青柳洋治氏提供）

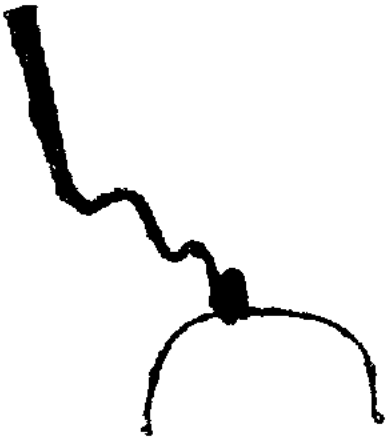
宗像の蛇行鉄器

■ 大井三倉遺跡出土

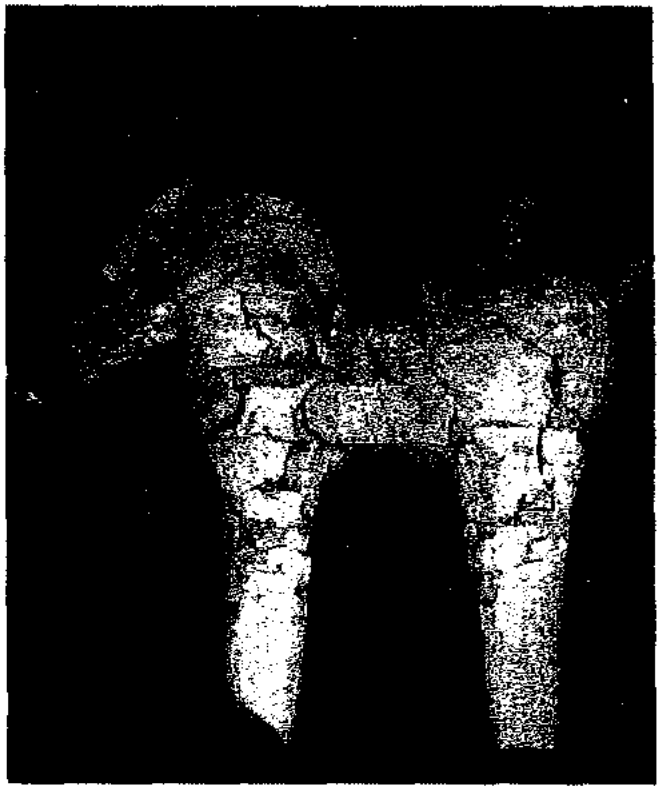
大井三倉遺跡第5号墳（6世紀末）から出土した蛇行鉄器は、ハンドル部と軸部から出来ている。ハンドル部はU字形、軸部は蛇のように曲がり、一端が中空の円筒形になっている。このような蛇行鉄器は、朝鮮半島と日本にのみ10数例しか発見されておらず、九州では2例目、いずれも宗像から出土している（宗像郡福間町の手光南2号墳）。

蛇行鉄器は北朝鮮の高句麗古墳壁画に、鞍の後の部分に旗をたてて、兵が馬にまたがっている絵があることから、旗立て用の道具と推定された。具体的にはU字形の部分を馬の鞍の後輪にとりつけ、軸部のソケットに旗を差し込んだ装飾品とする考え方が有力である。

また埼玉県行田市酒巻14号墳（6世紀後半）からは、旗つきの馬形埴輪が見つかっており、蛇行鉄器の用途を知る上で貴重な資料となっている。



▲ 大井三倉遺跡第5号墳出土の蛇行鉄器



◀ 埼玉県行田市酒巻14号墳出土の馬形埴輪

（行田市立郷土博物館提供）

「旗つきの馬形埴輪は全長81cm、長さ33cm、最長幅12cmの旗をつけると高さは1m近くになる。……問題の旗差し部分は、クランク状に曲がっており、受け口部分は旗を差し込み立てられるように深さ10cmほどの円筒状になっている」。[9]

その他の埋葬施設

久原遺跡で発見された埋葬施設として、弥生時代には土壙墓、甕棺墓があげられる。また古墳時代には、組合式木棺を有す粘土槨、竪穴式石室、横穴式石室などがあった。

そして弥生時代を主とするが、古墳時代にも継続して使われた埋葬施設として、石棺墓と石蓋土壙墓があげられる。久原遺跡では石棺墓4基、石蓋土壙墓4基が発見された。ほとんどが丘陵の傾斜面に作られており、2～3基ずつまとまっている。

■ 石棺墓

ほとんどの石棺墓は、石の一部を抜かれていたが、Ⅳ－3号石棺墓だけは、完全に残っていた。標高42mと最も高いところに築かれ、左右両側面に3枚ずつ、両小口に1枚ずつ板石を立てて箱形をつくり、四枚の板石で天井をふさいでいる。棺床には細かい石が敷かれ、大きさは、長軸1.7m、短軸0.4mである（写真①、②）。また中に刀子1点が副葬されており、墓のつくりから古墳時代のものと思われる。

■ 石蓋土壙墓

3基の石蓋土壙墓が、Ⅳ－18号墳の周溝内から縦に並んで発見された。長さ1.1～1.65m、幅0.3～0.4mの長方形の土壙を掘り、中に死者を埋葬したのち、数個の板状の石で蓋をした墓である（写真③、④）。副葬品は何もないが、おそらく18号墳を築いて、周溝を巡らした直後につくられた、古墳時代の墓ではないかと思われる。

またⅣ－3号石棺墓に隣接して、二段に掘り込んだ土壙の中央に死者を埋葬し、石で蓋をした墓も見つかっている（Ⅳ－4号石蓋土壙墓・写真⑤）。大きさは上段の広い掘り込みが長軸2m、短軸1.2mで、下段の実際に死者を安置した掘り込みは、長軸1.3m、短軸0.3mである。また副葬品は何もなかったため、はっきりとした時期は不明である。

① Ⅳ－3号石棺墓（天井部）

② Ⅳ－3号石棺墓（棺身）

③ 手前からⅣ－1・2・3号石蓋土壙墓（石蓋）

④ 手前からⅣ－1・2・3号石蓋土壙墓（棺身）

⑤ Ⅳ－4号石蓋土壙墓（石蓋）

◀ Ⅱ－1号墳（西から）

横穴式石室の入口部である。手前に墓道が伸びている。また調査用のトレンチを掘っているため、上の天井石まで露出している。（▽印が天井石）

横穴式石室をもつ後期古墳

久原遺跡で発見された古墳の大半は、横穴式石室をもつ後期古墳である。前期から中期にかけての粘土槨（Ⅲ－4号墳）や竪穴式石室（Ⅰ－1号墳）を埋葬施設にもった古墳が、一個人用の墓であったのに対し、横穴式石室は追葬が可能な家族用の墓といえる。

そしてこの横穴式石室は、墳丘の横に入口を設けたもので、中に死者を安置するための、石積みの墓室がつくられている。構造は通常、死者を安置する玄室（げんしつ）と、その前方に設けられた玄室への通路である羨道（せんどう）に分けられる。玄室の空間は高くて、広いのに対し、羨道は通路としての役割から、やや狭くて長い。また玄室と羨道の間に小形の室（前室）を設けた複室構造のものもある。

このような横穴式石室は中国・朝鮮を経て、5世紀代（古墳時代中期）には日本に波及する。そして6世紀代になると、全国的規模での横穴式石室の全盛期を迎えるわけだが、久原遺跡の横穴式石室も、ほとんどがこの時期に築かれたものである。また久原遺跡での前期から中期にかけての古墳が、尾根の高台や台地の端に単独で築かれたのに対し、後期になると、尾根線に沿って連続した古墳群がつくられる。

▶ 閉塞石（へいそくせき）（Ⅲ－7号墳）

数個の板石を積み上げて、入口を閉塞している。上の写真は、これら閉塞石を取り除いた後のものだが、本来は死者を石室内に埋葬すると、右のように入口を閉鎖する。ただし、これら閉塞石は簡単に取りはずすことが出来ることから、その後の追葬が可能である。

■　古墳の築造過程

①　丘陵上などに古墳の築く場所を決めると、円墳の場合は地表面を円形に整形し、中央に方形の墓壙とその前方に墓道を掘り抜く。また回りに溝（周溝）を巡らしていく。

②　墓壙の底に基礎となる大形の石を並べて、石室の輪郭を作り上げる。そして墓壙壁と石の間に土を埋め込みながら、中形あるいは小形の石を積み上げて石の壁を作り上げる（写真①）。

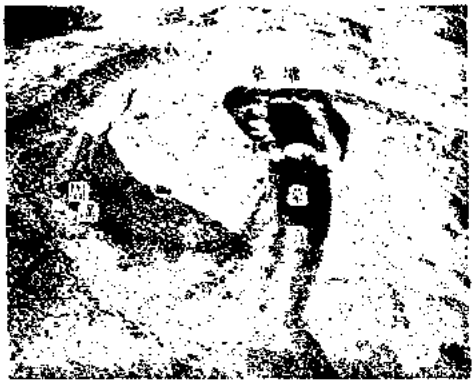
③　ある程度石を積み上げた段階で、回りに盛土をすることで、石室を固定し、最後に大形の天井石で蓋をする。さらにその上に盛土をして、古墳としての景観を整える。

■　宗像の横穴式石室

宗像の横穴式石室の特徴として、墓壙の深さが上げられる。Ⅳ－21号墳は、墓壙の深い例であるが、中には天井石まですっぽり墓壙内に入ってしまう石室もある。そのため、盛土のうすい、低墳丘の古墳がかなり見られる。

ところが、久原遺跡の最大尾根に立ち並ぶ古墳群（Ⅱ区）には、墓壙が浅く、高く盛土をした古墳が多い。例えば、Ⅱ－21号墳などはその典型といえる（写真②）。

また宗像では、6世紀後半になると、玄室の前に羨道を設けた石室が主流を占め、この時期になると複室構造のものが見られるようになる。Ⅲ－7号墳はその頃に築かれた複室構造のものであるが、これは前室の前に羨道をもたない石室である（第12図）。



①　Ⅳ－21号墳全景（西から）

②　Ⅱ－21号墳全景（西から）

▲　Ⅲ－7号墳の奥壁

▲　Ⅲ－7号墳の天井

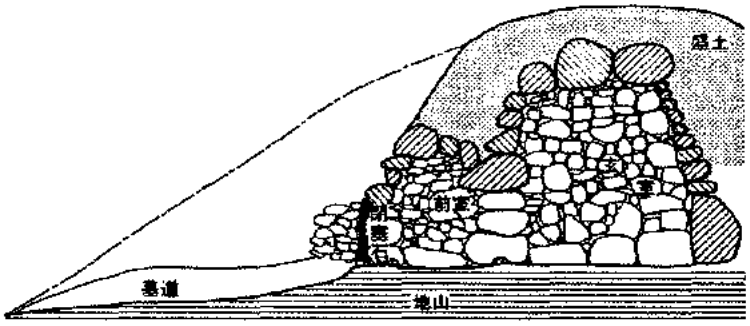
▲　Ⅲ－7号墳の入口方向

▶　Ⅲ－7号墳石室計測値

玄室長3.4m、幅1.9m、高さ3m

前室長2.3m、幅1.1m、高さ1.9m

墓道長6m



第12図　Ⅲ－7号墳（横穴式石室）断面の模式図

▲ 久原澤田古墳群遠景（北西から）

整備された古墳群

（久原澤田古墳群・宗像市指定史跡予定）

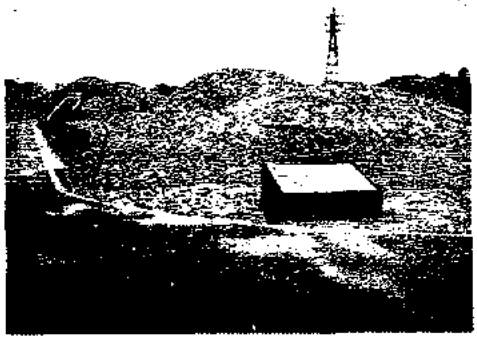
久原澤田古墳群は、久原遺跡中央を南北に走る、最大尾根の北端に位置している。この内の前方後円墳1基（II－3号墳）と円墳3基（II－4～6号墳）を保存・整備し、宗像市指定史跡の第1号に予定している。

昭和62年度宗像市総合公園事業全体計画の中で、古墳広場の整備計画（総工費1億400万円）が決定され、62年7月～63年3月にかけて整備事業が行われた。古墳群の復元図は、S＝1/100の地山測量図に基づき、S＝1/300の古墳復元模型を作製した。そしてこの復元模型に基づき、古墳広場の基本設計図が出来上がった。

各古墳に残っていた石室は、危険防止のため埋め戻され、墳丘は盛土をし、全面芝張りにした。また景観を生かすために、古墳群の北東の空間も、施設を設けず、芝張りにした。さらに前方後円墳の手前と、古墳群を一望出来る箇所に、2件の説明板（台座式）を設置した。前者が前方後円墳の説明で、後者が久原澤田古墳群の説明である。共に写真を大きく用いて、視覚的効果をもたせている。

このように近接して立ち並ぶ保存古墳は、6世紀代の久原遺跡の貴重な歴史的景観といえる。

＊久原は大字、澤田は小字名である。



■ 久原澤田古墳群計測値

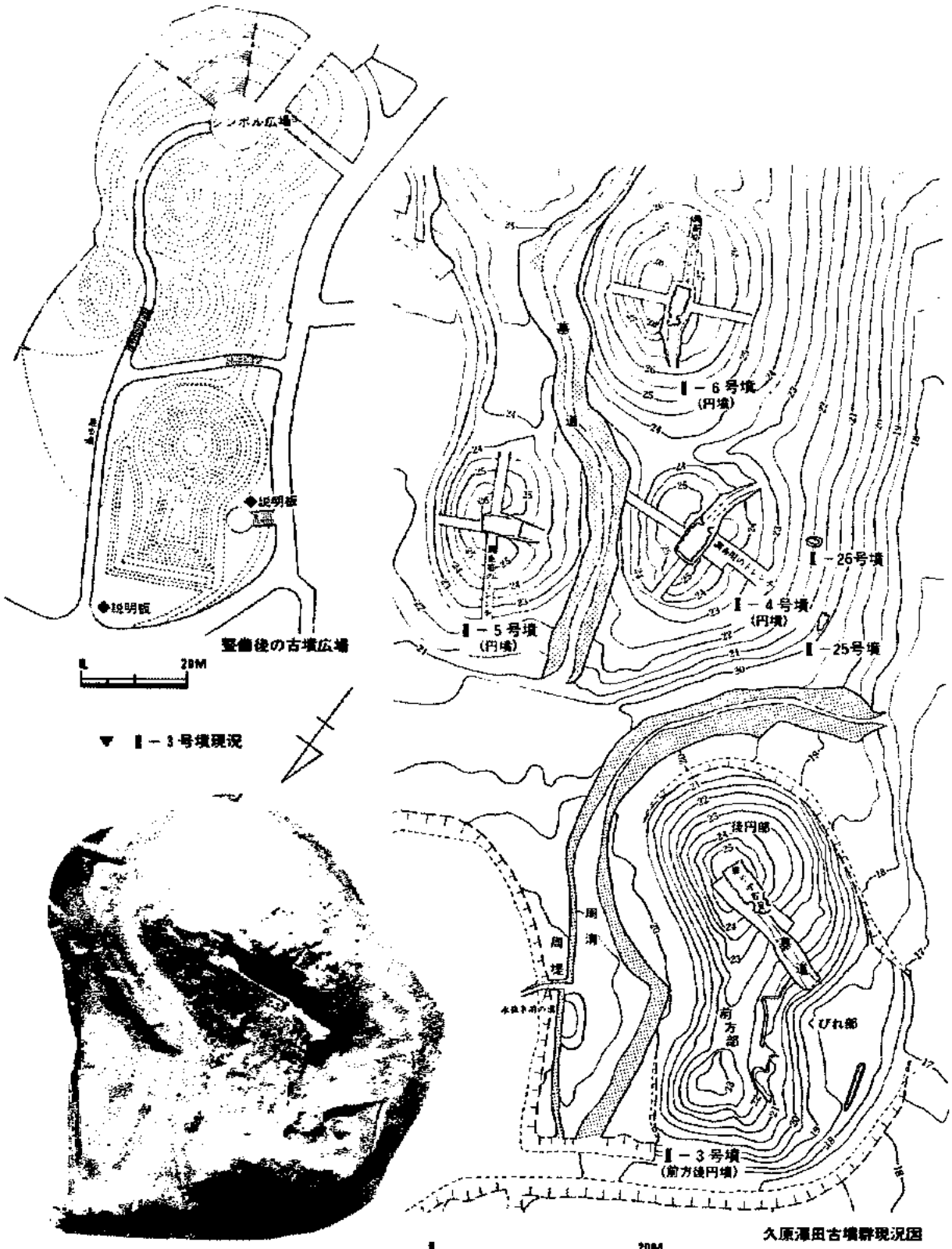
II－3号墳（前方後円墳）はP.24参照

II－4号墳（円墳）墳丘径15m、横穴式石室全長4m、6世紀前半

II－5号墳（円墳）墳丘径16m、横穴式石室全長4m、6世紀前半

II－6号墳（円墳）墳丘径21m、横穴式石室全長4m、6世紀前半

◀ 保存整備された久原澤田古墳群
手前に見えるのが、説明板（台座式）



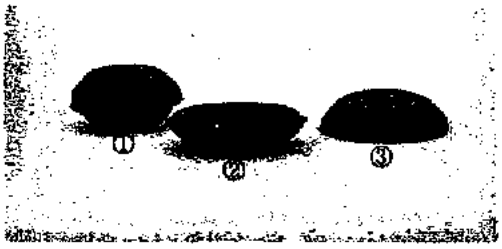
第13図　久原潟田古墳群の現況図と古墳広場

古 墳 時 代 の 須 恵 器

古墳時代の土器には、土師器と須恵器の二種類がある。土師器は、縄文式土器や弥生式土器の技術伝統を受けついだ赤焼きの土器で、須恵器は青白色をした硬い土器である。

須恵器は、古墳時代中期（5世紀代）に朝鮮半島から伝わった新しい技術による焼き物で、成形技術と焼成技術に大きな特徴が見られる。それまで人力手による回転で土器を作り上げて来たものが、ロクロを用いることで、回転力を利用しながら成形出来るようになる。またそれまで、野焼きされていた土器が、焼く時には必ず窯を用いている。窯は登窯といわれ、山の斜面をトンネル状に掘り抜いたり、斜面に長い溝を掘り、その溝の上部を天井でおおったものである。これにより、1100°C前後の高温度が得られ、硬質の須恵器が焼き上がる。

久原遺跡では、このような須恵器が古墳の周溝や墓道の中から多く発見されている。



▲ ① 壺杯　IV-21号墳、6世紀、墓道出土、高さ7cm
② 杯身　III-7号墳、6世紀、墳裾出土、高さ4.5cm
③ 杯蓋　III-7号墳、6世紀、墓道出土、高さ4.5cm

■ 壺杯

古墳時代の須恵器の器形には、壺、甕、蓋杯、高杯、器台、壺、提瓶などがある。杯は物を盛りつける器で、蓋杯とは蓋のある杯を指す。初期の段階から蓋杯は見られるが、6世紀の蓋杯の特徴は、杯身の底や蓋の天井が丸く、全体は浅く扁平で、小形である。また杯身に蓋を受けるための設備がある。

▲ 甕　II－4号墳、6世紀、
地山整形面出土、高さ44.5cm

■ 甕

甕は物を貯えるための大形の器である。底は丸底であることから、地面を掘り、すえつけたものであろう。『延喜式』（10世紀-平安時代）には、須恵器の名称と用法等の記載がある。そこに出てくるミカやユカが甕の一種と思われ、水、醸酒、酢、醤などを貯えていた液体の貯蔵用器となっている。

▲ ①提瓶　II－6号墳、5世紀、墳裾出土
高さ30cm
②提瓶　III－7号墳、6世紀、墳丘出土
高さ18.5cm

▶ ②の側面観

■ 提瓶

須恵器に特有な器形で、液体を入れる容器である。両肩には環状またはカギ状の把手が通常つけられ、水筒のようにさげて使われる。5世紀の終わりから6世紀初めに作られ初め、6世紀が中心となった。また体部の片側を平らにし、水筒として携帯しやすいようにしたものも見られる。

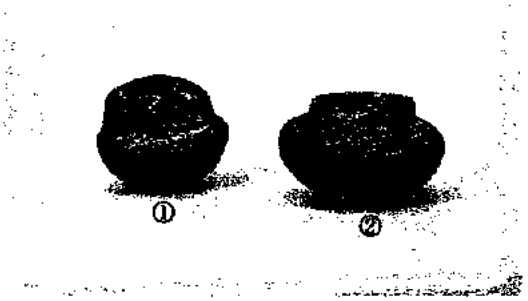
▲ ① 𤮔 Ⅳ－17号墳、溝内出土、6世紀、高さ12cm
② 𤮔 Ⅱ－4号墳、溝内出土、6世紀、高さ12.5cm
③ 𤮔 Ⅳ－4号墳、溝内出土、6世紀、高さ10cm
④ 𤮔 Ⅳ－17号墳、溝内出土、6世紀、高さ15.5cm
⑤ 𤮔 Ⅱ－5号墳、墳丘出土、6世紀、高さ12cm

■ 𤮔

液体を入れる容器で、丸い胴部に小孔が開いている。その小孔に篠竹をつきさして注ぎ口にした。𤮔とは、機能から来た名称で、はんぞうとも読める。はんぞうは、𤮔が半分本体の中に挿し込まれているという意味である（半挿）。また静岡県郷ヶ平9号墳では、管をさした状態の𤮔を持った人物埴輪も発見されている。[11]

■ 短頸壺

須恵器の壺にはいろいろな形がある。例えば大きく開いた口頸部をもつ広口壺、細く長い口頸部の長頸壺、短い口頸部の短頸壺などである。蓋をもった有蓋短頸壺には、大小二種類があり、小形のものは5世紀から、大形のものは6世紀に現われる。



①有蓋短頸壺（小形）　Ⅱ－4号墳、6世紀、溝内出土　高さ8cm

②短頸壺　Ⅳ－17号墳、6世紀、溝内出土　高さ7cm

■ 器台

器台には筒形器台と高杯形器台の二種類がある。ともに朝鮮半島の土器の系譜を引いており、須恵器の初期の段階に見られる。高杯形器台は、朝鮮半島の新羅、加耶地方に類例があり、大形の壺を上にのせるものである。

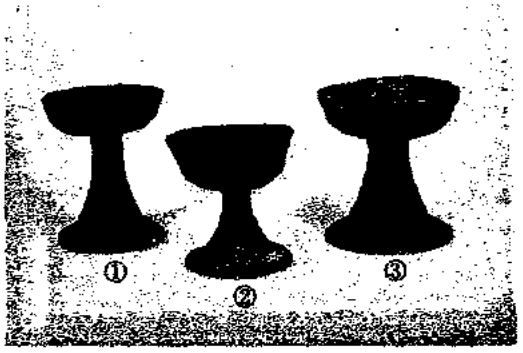
また脚台の透し孔は上下縦に並べてあけられたものと、市松状に並べたものがあり、特に前者は加耶地方に例が多い。

◀ 高杯形器台　Ⅱ－22号墳、6世紀、溝内出土、高さ42cm

■ 高杯

杯の底に脚をつけたものが高杯である。高杯には蓋のつくものと、つかないものがある。5世紀段階の高杯は脚が短く、杯の部分が大きかったが、6世紀になると脚が長くなっていく。そのため、脚の透し孔も一段のものから二段のものへと変化していく。そして7世紀に入ると、高杯は小形化し、脚には透し孔をあけなくなる。

このように、高杯一つをとっても、時間的な差によって、形の特徴が変化していくことがよくわかる。



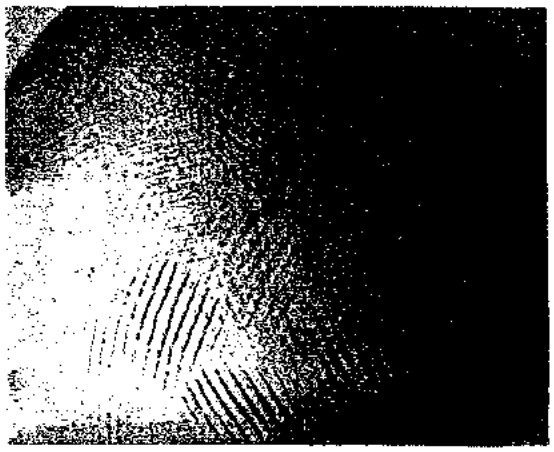
▲ ① 高杯　Ⅳ－16号墳、6世紀、溝内出土、高さ14cm
② 高杯　Ⅳ－21号墳、6世紀、溝内出土、高さ11.5cm
③ 高杯　Ⅳ－16号墳、6世紀、溝内出土、高さ14cm

須恵器の成形から仕上げまで

須恵器の成形技術の特徴に、ロクロの使用が上げられる。そしてこのロクロは、成形段階だけでなく、仕上げや文様を施文する時にも使用された。

ところが当時のロクロは、回転力が劣かったためか、粘土塊をいきなり挽き出して形を作ることがむずかしかったようである。そこで小形の成品も、最初は粘土紐を巻き上げて大体の形を作り、それからロクロを回転させて形を整えていったと思われる。また特に大形の甕などをつくる時には、粘土紐の巻き上げの他に、叩き技法を用いている。これは巻き上げと叩きを交互に行うことで、粘土紐を密着させ、形を整え、厚みを平均化させることに意味があった。

▲ 甕 II-4号墳、6世紀、墳丘中出土、高さ23cm

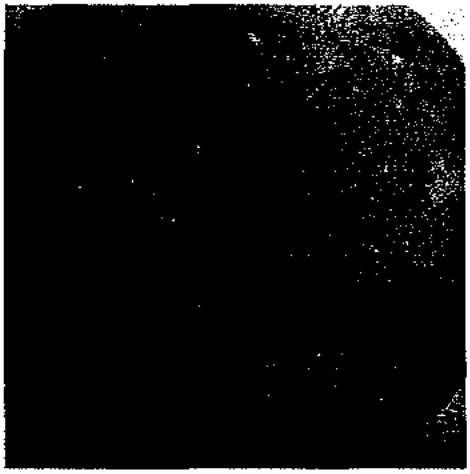


▲ 左の甕 底部の平行叩き目文

■ 叩き目

叩きの方法は、同心円をきざんだ道具を土器の内側にあて、平行線や格子目を刻んだ叩き板で外側を叩いていく。そのために土器の外面には平行叩き目文や格子叩き目文がつき、内面には同心円状の痕跡が残ることになる。また甕や壺の胴部の多くがこの方法でつくられ、底面も同様に叩き上げることから、原則として丸底の器形が出来上がる。

▶ 同心円状の痕跡



◀ カキ目

須恵器の器形には屈曲の強いものが多い。例えば壺や瓶などにそのことがいえるが、これは胴部と口頸部を別々に作り、それを後でつなぎ合わせた結果による。

左の写真は提瓶の胴部であるが、この中心点から径5cm（実寸）の範囲は円形の粘土板で蓋をした箇所である。つまりこの胴部の反対面を下に向け、球形の器体を作り上げるが、指を入れる箇所はどうしても円形の穴があく。そこで粘土板で蓋をし、写真の上方向に別の穴をあけてそこに別づくりの口頸部をつなぎ合わせたのである。

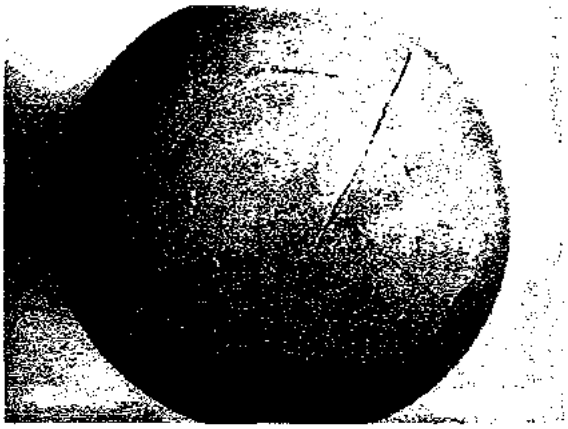
また胴部は粘土板で蓋をしたのち、ロクロを回転させながら、櫛歯状の道具で器面をなでるため、細線のカキ目が出来る。

■ 須恵器の文様

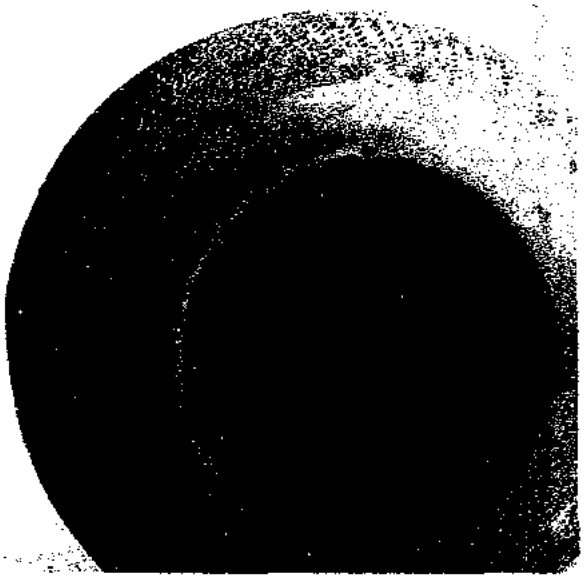
須恵器の文様は、全て水平に回りを巡っている。これはロクロの回転を利用して文様を施文していった結果といえる。また須恵器の文様は、甕や壺の表面などに多くみられ、初期の段階では、ヘラ描きの鋸歯文、斜格子文、波状文の他、貼付文、列点文、直線文などであった。それが後には櫛描文や貼付文が主流となる。左の写真は、甕の口縁部であるが、上から櫛描波状文、凹線、櫛描波状文、そして叩き目という構成である。

▶ ヘラ削り

杯の底面についている渦巻き状の削り跡は、ロクロで杯の形を作った後、生かわきの状態で杯の底を上向きにし、ロクロを回転させながら、粘土をヘラで削りとった跡である（ヘラ削り）。また底面を内から外にむけて削りとるため、削り跡や土器の胎土中に含まれている砂の引きずれた向きで、ロクロの回転方向を知ることが出来る。例えば大阪・陶邑（すえむら）古窯址群から出土した蓋杯の観察結果では、初期のころはほとんど左回り、その後しだいに右回りが増え、6世紀後半にはほとんど右回りに変わると言われる。[2]



▲ 短頸壺 Ⅳ-16号墳、6世紀、溝内出土、高さ6cm



▶ 刺突文（しとつもん）

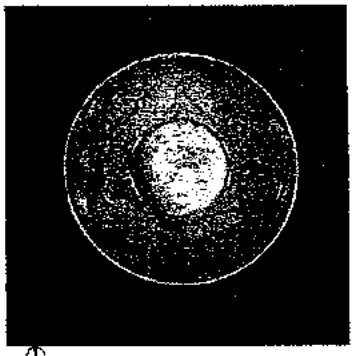
胴部の中程が強く屈曲しており、その屈曲部の上下に八の字形になるような刺突文が施されている。これは櫛を用いた刺突であるが、上からみるとロクロを回転させながら連続的に刺突文を施した様子がよくわかる。

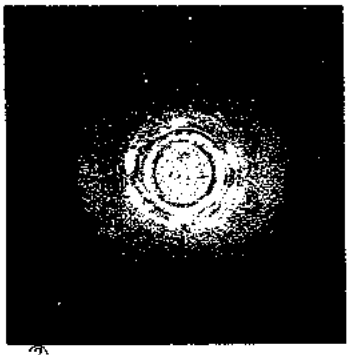
中世の輸入陶磁器

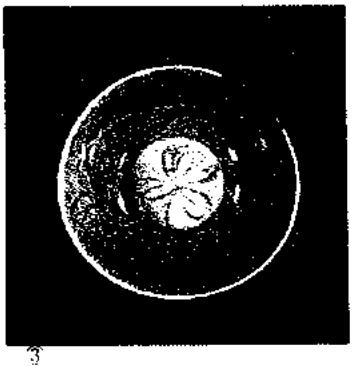
久原遺跡の台地の縁辺部を、東西方向に、幅２～３ｍ、長さ85ｍの大溝が走っていた。この溝の埋土中から、大量の中国製陶磁器と日常雑器が発見された。中国製陶磁器は、平安時代の終わりから、鎌倉時代にかけてのものが中心で、磁器は青磁と白磁に分けられ、陶器としては褐釉四耳壺が見つかっている（P.9参照）。

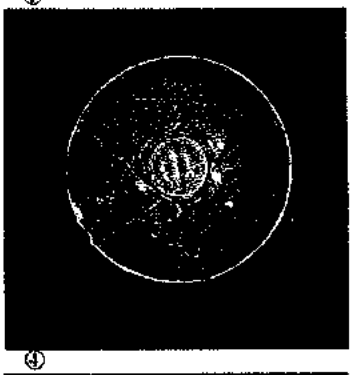
磁器と陶器は、両者とも釉がかけられ、窯でつくられたものであるが、磁器が長石の含有量の多い陶石を素材としたものに対し、陶器は粘土を素材にしている。また青磁は、釉の発色が青緑色で、白磁は一般的には素地が白く釉が透明のものをいう。そして大部分のものが中国宋代の青磁、白磁で、青磁には浙江省を中心に産出した龍泉窯系のものと、福建省同安窯系のものが見られる。

龍泉窯系としては、内面に草花をあしらったものや、外面に蓮弁の文様をつけたものがある。また裏を返すと高台の径が比較的大きく、高台の上と内部以外には釉がかけられている。そして同安窯系のものは櫛状およびヘラ状の道具で内面や外面に文様をあしらっている。また高台は小さく、外面の下半部には釉がかけられていない。さらに白磁には口縁部が玉縁ちのものや、端部が水平のものがあり、高台の径は比較的大きい。

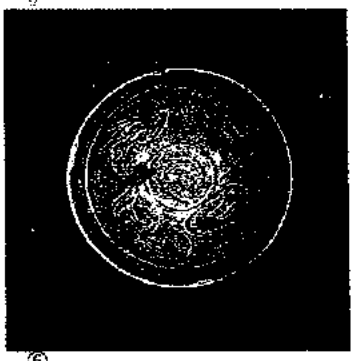

①

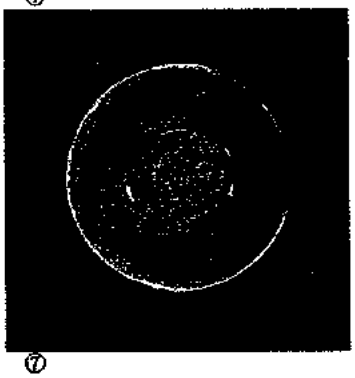

②

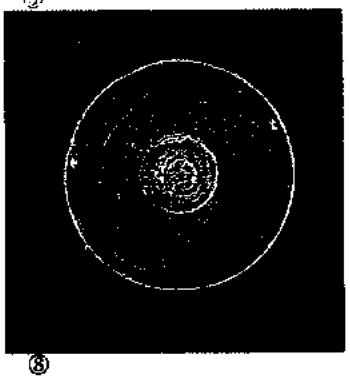

③

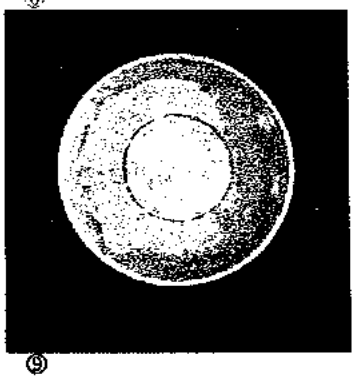

④

⑤


⑥


⑦


⑧


⑨

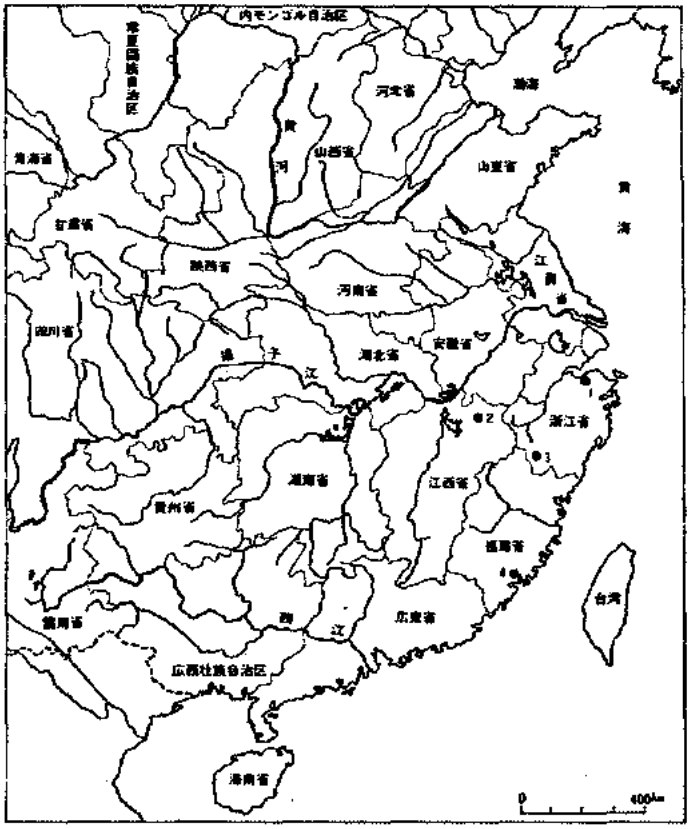
▶ Ⅰ－1号土壙墓

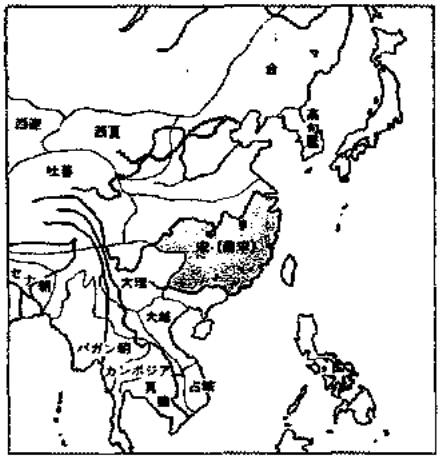
久原遺跡では3基の中世土壙墓が発見されたが、完全に残っていたのはⅠ－1号土壙墓のみである。長軸2.8m、短軸1mの長方形の掘り込みで、北側の一画から青磁椀1点（写真①・②）、土師器皿1点と紙状の漆製品が発見された。また鉄釘が24点見つかっており、いずれも木質が付着していることから、木製の棺を作る時に用いられたものと思われる。このことから死者を木棺に葬むり、土壙内に埋めたのち、その上に墓標として数個の石を配置したのではないかと思われる。

（写真右はⅠ－2号土壙墓）

◀ 青磁・白磁の計測値

①・②	青磁	Ⅰ－1号土壙墓	副葬品	口径 16.5cm	底径 6.1cm	高さ 7.3cm	龍泉窯系	
③	青磁	大溝	埋土中	口径 16.8cm	底径 6.3cm	高さ 7cm	龍泉窯系	
④・⑤	青磁	大溝	埋土中	口径 15.8cm	底径 5cm	高さ 7cm	同安窯系	
⑥	青磁	大溝	埋土中	口径 15.8cm	底径 4.8cm	高さ 6.5cm	同安窯系	
⑦	青磁	大溝	埋土中	口径 15.8cm	底径 6.1cm	高さ 7cm	龍泉窯系	
⑧	青磁	Ⅱ－3号墳	周溝内埋土中	口径 16.2cm	底径 5.3cm	高さ 7cm	同安窯系	
⑨	白磁	大溝	埋土中	口径 16.5cm	底径 7.3cm	高さ 6.3cm		





第14図　12世紀の宋（南宋）領域図

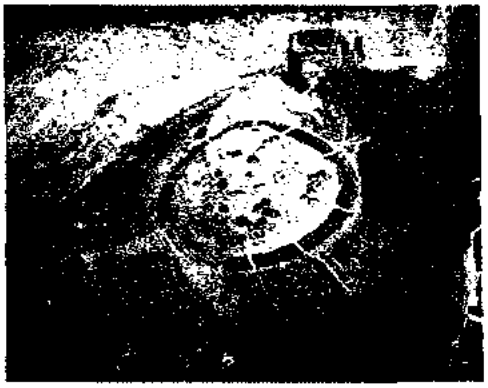
第15図　宋代主要古窯跡分布図

① 越州窯　② 景德鎮
③ 龍泉窯　④ 同安窯

弥生時代の宗像

■ 概要

宗像の弥生時代の遺跡数は、福岡地方などに比べるとかなり少ない。その中で、最も早い時期に形成された遺跡が津屋崎町の今川遺跡で、当時の海岸線に近い微高地上に位置している。これは弥生時代初頭のその他の遺跡（福岡市板付遺跡や新宮町夜白遺跡）と同様な立地の傾向である。それが以降の前期から後期にかけては、釣川流域の丘陵上に遺跡の分布を移すようになる。但し、発見された遺跡は共同墓地や貯蔵穴群が中心で、明確な集落跡や水田跡は見つかっていない。これは丘陵上には集落を作らず、より低い微高地に生活の主体的な場があった可能性が高い。そのために、後世の水田開発等により、集落の痕跡の多くが、すでに破壊されているとも考えられる。



▲ 光岡長尾遺跡（環溝と貯蔵穴群）

また共同墓地の埋葬施設として、福岡平野に盛行した甕棺墓に対し、小児甕棺墓を除いては全て土壙墓である。これは墓制の上から糸島、福岡地方とは異なり、遠賀川下流域から豊前地方に類似した様相であるといえよう。

■ 主要遺跡について

【今川遺跡】[13]

（位置）　津屋崎町宮司の海岸砂丘上に位置し、標高約10mである（第2図参照）。

（発見された遺構と遺物）　住居跡1基、貯蔵穴2基と断面V字形の溝が発見された。溝内からは多量の土器、土製品等が出土し、また包含層中の出土遺物から前期初頭の遺跡と位置づけられる。

（特記事項）　住居跡の形態は朝鮮無文土器文化のものに類似する。また発見された鉄鏃、銅鏃、銅ノミは朝鮮半島に直接結びつく出土品といえる。

【大井三倉遺跡】[14]

（位置）　釣川の支流、八並川西岸、大井の丘陵上に位置し、標高約20mである。

（発見された遺構と遺物）　中期の貯蔵穴3基と住居跡1基、V字溝が発見された。溝の中から、多量の土器や土製品、獣骨等が出土し、前期中葉に属する。

（特記事項）　土器は今川遺跡や遠賀川下流域のものと類似する。

【光岡長尾遺跡】

（位置）　釣川の支流、朝町川の南の丘陵上に位置し、標高約30mである。

（発見された遺構と遺物）　住居跡、貯蔵穴、V字溝が発見された。V字溝は50基以上の貯蔵穴を取り囲むように巡らされた、正円に近い環溝で、東西約42m、南北約46mである。また溝の中から前期末から中期にかけての土器と石器が出土している。

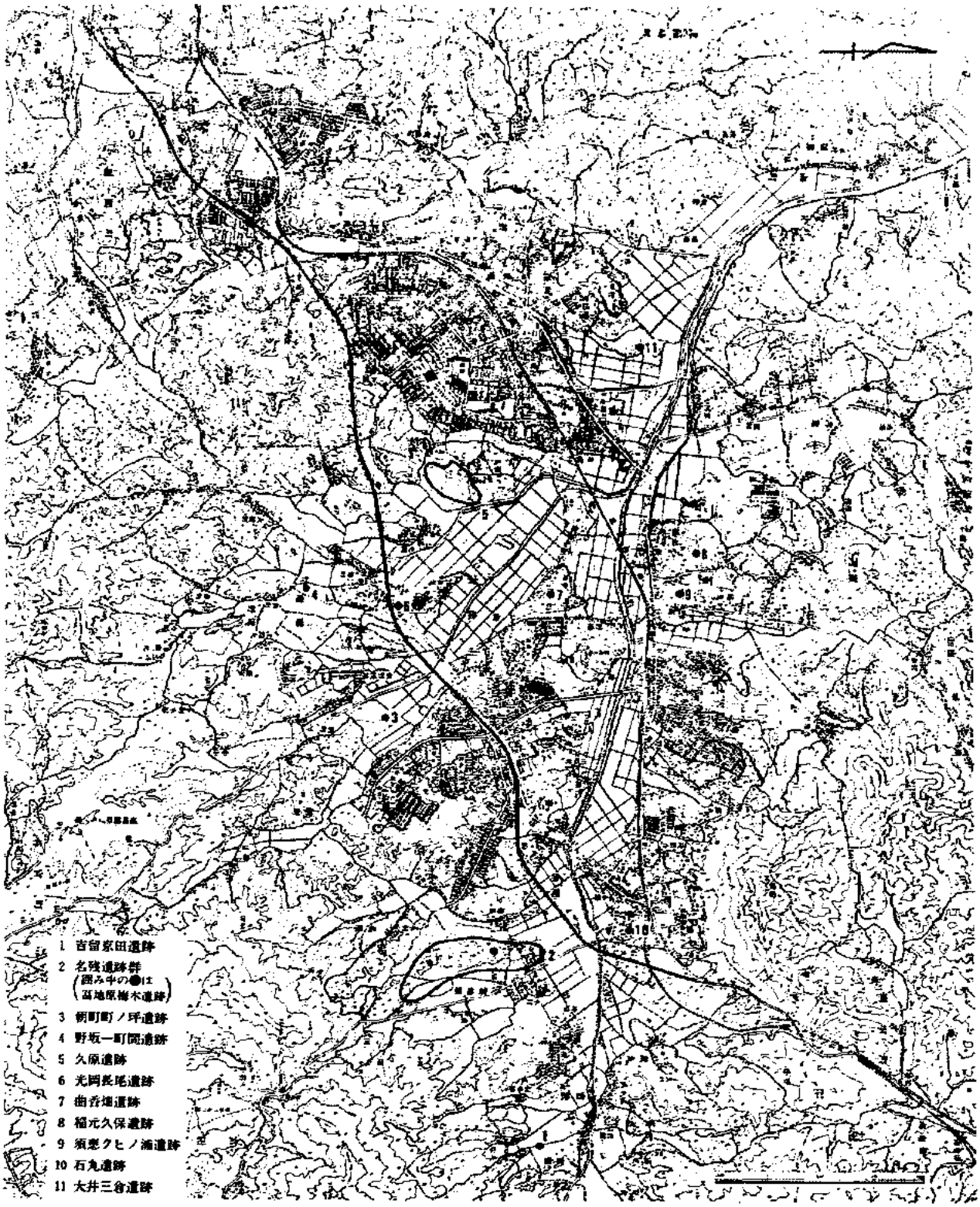
（特記事項）　溝の中から卵形をした土笛が発見された。土笛は全国7遺跡で発見されているが、その中で最大である（高さ9.7cm、最大幅6.0cmで上に吹口をもっている。さらに吹口の回りには4つの小孔があけられている）。

【吉留京田遺跡】[15]

（位置）　新立山から北に伸びる丘陵上に位置し、標高約35mである。

（発見された遺構と遺物）　後期の小児甕棺墓3基、住居跡1基、土壙墓1基が発見された。

（特記事項）　小児甕棺墓の一つから、副葬品としてガラス製小玉と碧玉製管玉が発見された。



第16図　弥生時代の主要遺跡分布図（宗像市内）

古 墳 時 代 の 宗 像

■ はじめに

宗像の古墳時代は、5世紀代、海岸線に集中する前方後円墳群や、6世紀代、釣川流域の丘陵上に並ぶ円墳群などによって代表される。また古墳出土のものには、朝鮮半島からもたらされた新羅土器などのように、大陸との交流を裏づける資料も多い。[8]

ところで、このような宗像での古墳の集中や、大陸系文物の豊かさは、海上交通や釣川流域での水田開発が、それだけ進んだという理由だけではなさそうである。そこで以下、次の2点について述べてみたい。

▲ 鍛冶工具（鉄鉗と鉄鑿）

朝町山ノ口5号墳出土

■ 鉄生産

近年、特に宗像で注目されている発見は、鉄生産に関るものである。そして大まかには三つの発見に分けることが出来る。

【鉄の素材の発見】 久原遺跡の北側の低丘陵（標高10m）に位置する久原瀧ケ下遺跡は、古墳時代初めの集落跡である。このうちの1軒の住居跡の床面中央から、完形の鉄鋌（長さ32cm）が発見された。鉄鋌とは鉄の延板のことで、これを加工して鉄製品を作るわけだが、朝鮮半島から輸入された鉄素材である。

【副葬されていた鍛冶工具】 津屋崎町の奴山8号墳（第2・9図参照）は、全長50mの5世紀の前方後円墳であるが、この横穴式石室内から鍛冶工具（鉄鉗とノミ）が発見された。[4] また6世紀になると、釣川上流域の丘陵地（標高約40m）にある朝町山ノ口遺跡の5・6号墳横穴式石室内から、鉄鉗と鉄づちがセットで発見された。[9]

これら鍛冶工具は、鉄を鍛えていく時に用いる道具で、鉄鉗で加熱された鉄材をはさみ、鉄床の上に置き、鉄づちでたたき上げていくわけである。また朝町山ノ口5号墳出土の鉄鉗は全長約47cmあり、日本でも最大級のものである。さらに鉄づちの重さは約3.6kgある。

【鍛冶炉の発見】 釣川本流やその支流の上流域で、集落跡が確認されているが、そこから鉄生産に関る遺跡が発見されている。

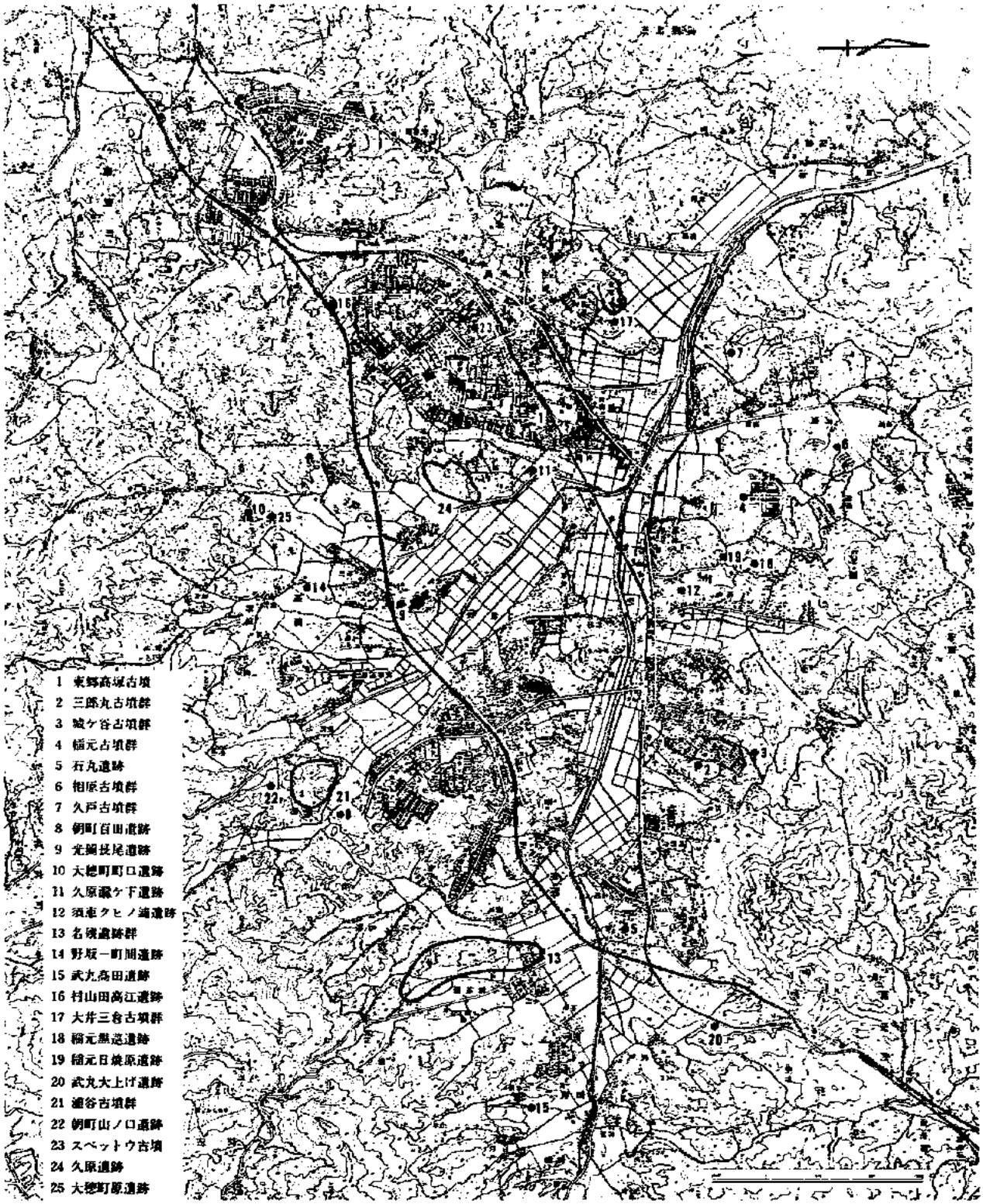
武丸高田遺跡は標高約40mの丘陵上に位置している集落跡で、そのうちの重なりあった2軒の住居跡の床面中央で鍛冶炉が発見された。これは小形のもので、すり鉢形をし、住居跡の年代から6世紀代と考えられる。[9] また野坂一町間遺跡は標高約30mの丘陵上に位置する集落跡で、このうちの1軒の住居跡の床面中央でも鍛冶炉2基が発見された。構造は武丸高田遺跡と同様のものであるが、時期は5世紀代と考えられる。[9]

以上、古墳時代の各時期にわたり鉄生産に関る例をあげてみたが、古墳時代初めの集落内からの鉄鋌の出土は、海上交通を通じて、早い段階から鉄生産に大きな比重がかけられていた証拠ともいえる。また鍛冶工具を副葬していた古墳の埋葬者は、おそらく鉄生産にたずさわった集団のリーダーであっただろうし、それを裏づけるように、5世紀代には集落内で鉄生産が実際に行われていたのである。そしてこのような鉄生産と共に、もう一つの大きな柱が、次の須恵器の生産である。

■ 須恵器の生産

宗像市須恵・稲元は、福岡県下でも有数な窯跡地帯である。調査されたのは3遺跡のみであるが、稲元日焼原遺跡と稲元黒巡遺跡では、いずれも4基ずつの窯跡が発掘されている。その結果、6世紀代の窯跡であることがわかった。

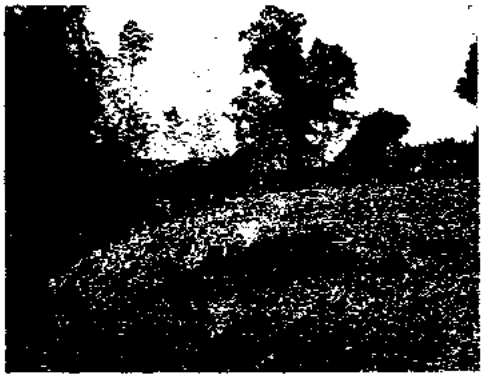
このように、宗像の古墳時代には、早い時期からの鉄生産および6世紀代になっての須恵器生産という、二つの生産面からの力の充実が考えられる。また言いかえるならば、古墳の集中や副葬品の豊かさをもたらした、生産面から語れる、直接的な根拠ともいえよう。



第17図　古墳時代の主要遺跡分布図（宗像市内）

Q & A

久原Ⅰ－1号墳の現況



浦谷古墳群J－3号墳の現況（▽印が古墳の箇所）

Q　どうしてそこが遺跡とわかるのですか。

市の教育委員会では、どの場所に、遺跡があるかということを、分布調査によって、調べています。またどうしても土地を開発するという時には、現地にいって遺跡があるかないかをさらに確認します。そしてそこに遺跡があるとわかった時は、埋蔵文化財の発掘調査を行うことになります。

ところで、どうしてそこに遺跡があるかわかるのかということですが、特に昔の集落の跡などについては、上の土をはいでみないと、正直なことはわかりません。ただし、目安として田んぼや畑などで開墾されている時は、下に埋まっている土器などが、表面で採集出来ることがしばしばあります。

また集落がつくられやすい地形かどうかということも判断の材料になります。

また古墳については、宗像の丘陵地にはほとんどそれがあると考えられます。例えば丘陵上に自然地形ではありえないような、高まりがあるようなものは、古墳の可能性が大きいです。特に宗像の場合は低い墳丘の古墳も多いために、浦谷古墳群J－3号墳のように全く自然地形と変わらない場合も多いのです。逆に久原Ⅰ－1号墳のようにひじょうに高い墳丘をもった古墳は、宗像市内では珍しく、これは久原遺跡の一つの特徴といえます。

Q　盗掘とは何ですか。

埋蔵文化財は、国の財産であるために、現在では文化財保護法により文化庁に届出をしないで採掘することは、盗掘という行為になります。

ところで、宗像には古墳が多いわけですが、現在までにそのほとんどは盗掘を受けています。古墳にみられる盗掘の歴史は古く、中世が一つの全盛期であったともいわれています。もちろん盗掘は、中の副葬品目当てで、入り込む場合も多いのですが、石室に使われている石材ごと持ち出していることも多いようです。例えば45ページの「古墳あれこれ」を見ますと、古墳によって石材の残存状況が全て違います。中には、全て持ち出されている古墳もあります。これは石材を、石垣などに使う目的で、運び出している場合が多いからだと思います。

さて、久原Ⅱ－3号墳（前方後円墳）を例にとりますと、これも石室内は、完全に盗掘を受けていました。この石室の入口部の閉塞石は全て取り除かれていたので、第一の侵入路は入口からでした。次にある程度の年月がたちますと、入口から墓道にかけて、土が流れ込んで、埋まってしまいます。そのような時に、上の方から穴をあけて、天井石の下の石を抜いて、中に入っています。これが第二の侵入路です。このように、古墳を調査していきますと、生々しい盗掘の歴史すら浮かび上がって来ます。

久原Ⅱ－3号墳整備作業（墓道から砂を入れる）

Ⅱ－3号墳整備作業（石室の入口から砂を入れる）

Q　どのように埋蔵文化財の調査を行うのですか。

埋蔵文化財の調査は、実際に現地で行われる発掘作業、そして発見された遺物や遺構図を室内に持ち返って洗い、復元、実測などを行う整理作業、さらにそれを分析し、まとめ上げる報告書の作成という３工程にわかれます。

そこで、このうちの発掘作業について、説明します。埋蔵文化財の多くは、土中に埋もれているものがほとんどですので、上から順に土を１枚ずつ剥ぎとっていくことが基本になります。これは古墳も集落跡の調査も同様で、掘る対象によって部分的に下げるのか、全面を下げるのかといった違いが出て来ます。例えば、古墳の場合ですと、墳頂部からトレンチ（確認用の方形の溝）を掘って、石室などを探っていきます。またそれと共に、どのように盛土をしていったかを調べるために、墳丘にトレンチをあけます。

このように古墳構造の調査をしながら、石室内や墳丘に埋め込まれている遺物の位置を確認します。遺物（特に土器）は年代決定の重要な資料となります。また、それが置かれている位置によって、葬制の一端を知ることにもなりますので、図化や写真化が必要になります。すなわち、私達の祖先の歴史を物から解き明かしていくためには、大変な時間と労力が要求されるのです。

平板実測による地形図作製

石室内から外へ土を運ぶ

石室内床面の検出

調査開始前のお墓

古墳の墳丘面をきれいにかき出す

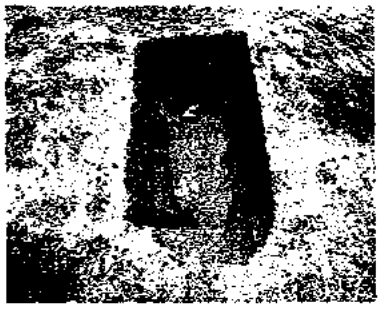
古墳の地山整形面の検出

周辺の溝の検出

久原遺跡の古墳あれこれ

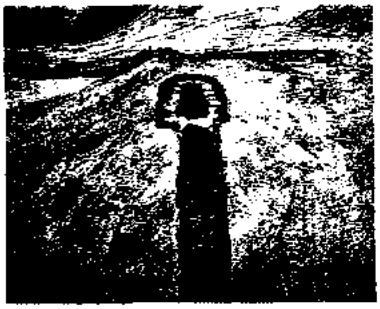
Ⅰ－16号墳

Ⅳ－１号墳


Ⅳ－７号墳

Ⅰ－24号墳

Ⅳ－５号墳


Ⅳ－８号墳

註

① 渡辺正気　1985　「古代の宗像」　『歴史手帖　13巻9号　〈古代の宗像〉』　名著出版
② 同　上　　P.6
③ 福岡県教育委員会　1978　『山陽新幹線関係埋蔵文化財調査報告』第7集　上・下巻
④ 福岡県教育委員会　1980　「若宮宮田工業団地関係埋蔵文化財調査報告」第2集
⑤ 福岡市教育委員会　1985　『史跡　金隈遺跡』　福岡市埋蔵文化財調査報告書　第123集
⑥ 蓮口治氏の御教示による。
⑦ 津屋崎町教育委員会　1987　『新原・奴山古墳群』　津屋崎町文化財報告書　第5集
⑧ 横田義章　1985　「古墳時代の象嵌文様―九州の諸例紹介を中心に―」『九州歴史資料館研究論集10』
⑨ 青柳洋治　1980　「ルソン島北部における土器づくり―アトル村の一事例―」『黒潮の民族・文化・言語』角川出版
⑩ アサヒグラフ編集部　1988　『新・古代史発掘』　朝日新聞社　P.120
⑪ 田辺昭三　1975　『須恵』　陶磁大系4　平凡社
⑫ 原口正三　1979　『須恵器』　日本の原始美術4　講談社
⑬ 津屋崎町教育委員会　1981　『今川遺跡』　津屋崎町文化財調査報告書　第4集
⑭ 宗像市教育委員会　1987　『大井三倉遺跡』　宗像市文化財調査報告書　第11集
⑮ 宗像市教育委員会　1986　『埋蔵文化財発掘調査概報』　宗像市文化財調査報告書　第10集
⑯ 宗像町教育委員会　1979　「粗原古墳群」　宗像町文化財調査報告書　第1集
⑰ 福岡県教育委員会　1977　『新原・奴山古墳群』　福岡県文化財調査報告書　第54集
⑱ 宗像市教育委員会　1984　『朝町山ノ口Ⅰ』　宗像市文化財調査報告書　第14集
⑲ 宗像市教育委員会　1984　「埋蔵文化財発掘調査報告書―1984年度」　宗像市文化財調査報告書　第9集
⑳ 同　上

参考文献

渡辺正気　1987　『日本の古代遺跡34　福岡県』　保育社
佐田　茂　1988　「宗像の古墳」　『宗像の歴史と文化財』　宗像市教育委員会編
田村圓澄　1988　「宗像と飛鳥朝」『宗像の歴史と文化財』　宗像市教育委員会編
原　俊一　1986　「宗像の考古学」　『福岡考古　第13号』　福岡考古懇話会
原　俊一　1988　「古墳時代の宗像」『古代を考える　沖ノ島と古代祭祀』　吉川弘文館
武末純一　1982　「有柄式石剣」　『末盧国』　唐津湾周辺遺跡調査委員会
岩永省三　1980　「弥生時代青銅器型式分類編年再考―銅矛七を中心として―」『九州考古学No.55』
安部裕久・清水比呂之　1987　「久原遺跡出土の両耳付銅矛」『考古学ジャーナル　No.272』　ニューサイエンス社
小林行雄　1965　『古鏡』　学生社
樋口隆康　1979　『古鏡』　新潮社
板本美夫　1985　「4―5世紀の馬具」『考古学ジャーナル　No.257』　ニューサイエンス社
小林行雄編　1975　『世界考古学大系3　日本Ⅲ』　平凡社
宗像町教育委員会　1979　『久戸古墳群』　宗像町文化財調査報告書　第2集
宗像町教育委員会　1980　『久戸古墳群』　宗像町文化財調査報告書　第3集
福間町教育委員会　1981　『手光古墳群Ⅰ』　福間町文化財調査報告書　第1集
矢部良明　1983　「宋代青磁の展開」『世界陶磁全集12』　小学館
横田賢次郎・森田勉　1978　「大宰府出土の輸入中国陶磁器について」『九州歴史資料館研究論集4』

■　協力関係者

本書の作成・編集にあたり次の方々にご協力いただきました。

青柳洋治
池崎譲二
石丸　洋
折尾　学
葛城秀人
菰口　治
田中寿夫
塚田良道
橋口達也
濱石哲也
浜田信也
横田義章
行田市立郷土博物館
津屋崎町教育委員会
福岡県教育委員会
福岡市埋蔵文化財センター

久原遺跡
―概報　古代宗像をさぐる―
宗像市文化財調査報告書
第19集

昭和63年3月31日
発行　宗像市教育委員会
福岡県宗像市大字東郷995
印刷　青柳工業株式会社
福岡市中央区渡辺通2丁目9－31

表紙掲載は久原遺跡出土の玉類